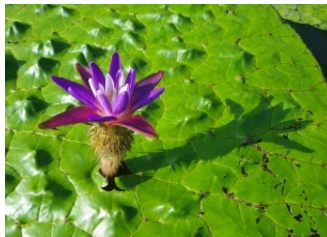
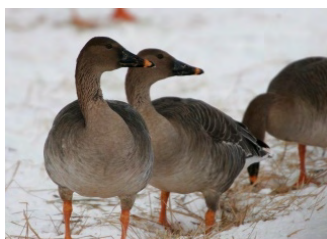


第2部



調査報告：新潟市の「潟」

第1章 潟の概要

(1) 調査・研究対象とする「潟」

新潟では古くから、その規模や成因にかかわらず、湖沼の多くが「潟」と呼ばれ、生業による持続的な関わりによって、多様な動植物が生息・生育する湿地環境が保たれてきた。そこは、人々の暮らしや文化と深くかかわり、自然と人が共生する潟、つまり「里潟」といえる場所であった。

現在、潟と人との関わりは、社会環境の変化に伴い、直接的な関わりが減ってきている。それでも、潟環境を保全する、福島潟のヨシ焼きやヒシもぎ、佐潟の潟普請やヨシ刈りなど、潟にかかわる活動を展開している人々も存在しており、そこには、かつての「里潟」の面影を留めている。

そのような状況の中、潟を憩いの場や活動の場とする、潟と人との新たな関係性も構築され始めている。新潟の「潟」は、ふるさとを象徴し、都市と自然が共生する類いまれな環境である。

当研究所では、このようなことを踏まえ、以下の2つにあてはまる16の潟を調査・研究対象とした。

1. 越後平野の湖沼のうち自然的要因により形成されたもの、および自然的要因により形成されたのち人工的改変を受けたもの。
2. 「1」のほか、人工的に形成された湖沼のうち、暮らしや文化、生業など、人との深い関わりによって水辺の物質循環が維持されてきたもの。

(2) 潟の生態

1) 遷移

遷移には、陸地で始まる「乾性遷移」と、湖や池など水のある場所から始まる「湿性遷移」とにわけることができるが、潟の遷移はこの「湿性遷移」にあたる。

潟のような広い水辺空間は、風や川によって運ばれてくる土砂、潟の中にある動植物の遺骸(いがい)などが潟の底に堆積していくと、水深が浅くなっていく。沿岸域の水生植物群集の分布域は、水深が浅くなるにつれて、次第に沖へと拡大し、や

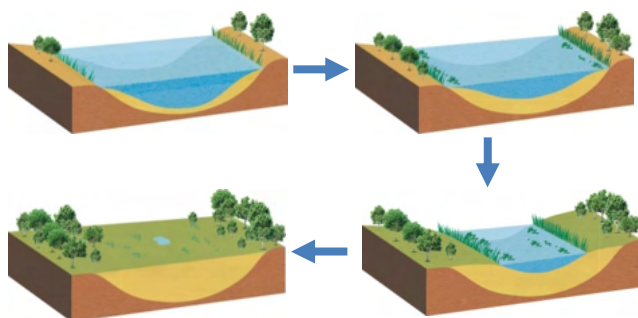


図1: 湿性遷移の過程

多田多恵子・田中肇(2010)「大自然のふしぎ 増補改訂 植物の生態図鑑(学習研究社)」より引用・改変

がては潟全体が水生植物群集で覆われていく。さらに浅くなると湿性植物が全体を覆い、やがて湿原、草原へと移り変わっていく(図1)。

2) 潟の生態系

湿性遷移の中で「潟」は、生物多様性が最も豊かな段階である。その理由として、潟には陸域や水域だけでなく、その境界となる水陸移行帯があり、植物種が多いことがあげられる。

潟の水陸移行帯には、図2のように、水上に茎と葉を伸ばす抽水(ちゅうすい)植物、葉を水面に浮かべる浮葉(ふよう)植物、全体が水中にあり、水底に根を張る沈水(ちんすい)植物が生育している。抽水植物群落は野鳥のすみかや営巣場所として、また、浮葉・沈水植物群落は、野鳥だけでなく魚類や両生類、昆虫類のすみか、えさ場となる。多様な植物がすみ分けしているこの空間は、多くの生き物たちが生育・生息している重要な場所である。

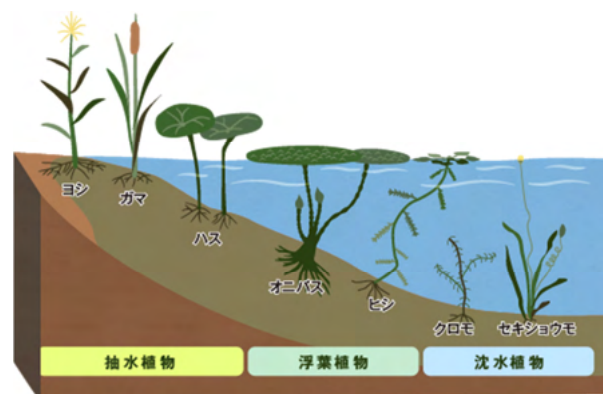


図2: 水陸移行帯における水生植物の分布図
桜井義雄、国土交通省霞ヶ浦河川事務所編著(2004)「霞ヶ浦の水生植物 1972~1993 変遷の記録」より引用・改変

3) 潟における人の営み

潟は、遷移の途中の段階であるため、移り変わりやすい環境である。この「潟」の環境を維持するためには、自然的であれ、人為的であれ、何かしらの遷移を抑制する働きが必要になる。

過去行われていた潟における人の営みは、潟の遷移を抑制し、潟環境を維持するための重要なものであった。

例えば、ヨシを刈取り、屋根草や壁の下地、ヨシズの材料として利用することは、ヨシが吸収した水質汚濁の原因物質(栄養塩類)を潟の外へ排出することになり、潟の水質浄化に大きな役割を果たすとともに、ヨシの堆積を取り除く効果もあった。

また、潟底の土をかき揚げる「ドロ揚げ」は、潟が浅くなることを防ぎ、湿性遷移を止めることにつながった。潟底の土は、多量の有機質を含み、稲作の肥料や苗床として利用された。低湿地の干拓土やアゼ作りにも重宝したといわれている。

（3）潟の生物

新潟市の潟には多種多様な動植物、多くの絶滅危惧種が生育・生息している。

例えば鳥類では、毎年飛来するコハクチョウは福島潟、鳥屋野潟、佐潟などをねぐらとして毎年10,000羽以上が越冬しており、その数は日本一を誇る。また、国の天然記念物であり、準絶滅危惧種（注1）に指定されているオオヒシクイは毎年5,000羽以上が飛来し、福島潟が日本一の越冬地となっている。

植物では、絶滅危惧Ⅱ類（注1）に指定されているオニバスが生育しており、新潟市が国内における自生の北限となっている。

1) 潟の植物

潟の中に生育する代表的な水生植物として、抽水植物ではヨシ、ガマ、ハス、浮葉植物ではオニバス、ヒシ、アサザ、沈水植物ではクロモ、エビモなどがあげられる。

また、潟の周りはヨシの他に、ヤナギ群落やハンノキ群落が点在している。さらに、湖岸を囲む林では、スギ植林、クロマツ林、アカマツ林、コナラ林などがある。そして、サクラ類や暖地性照葉樹のタブノキ、シロダモなども多く、エノキ、オニグルミ、ヤマグワなどの高木や、ニワトコ、ウツギ、ノイバラなどの低木、ノブドウ、フジなどのツル植物も繁茂している。



ヨシ



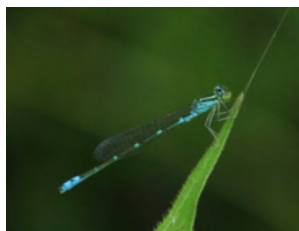
オニバス

2) 潟の動物

【昆虫類】

モートンイトトンボ、キイトトンボ、クロイトトンボ、セスジイトトンボなどのイトトンボ類やモノサシトンボ、オオモノサシトンボなどのモノサシトンボ類、シオカラトンボ、アキアカネ、コシアキトンボ、チョウトンボといった、浅い止水域で幼虫期を過ごすトンボ類が生息している。

また、アメンボ、ミズカマキリといった水生カメムシ類やゲンゴロウの仲間、ミズスマシの仲間、ガムシの仲間など、さまざまな



セスジイトトンボ



チョウトンボ

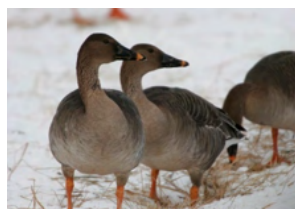
種類の水生コウチュウ類が生息している。また潟の周りの草地には、バッタ類、カメムシ類や草地性のチョウ類が見られる。

【鳥類】

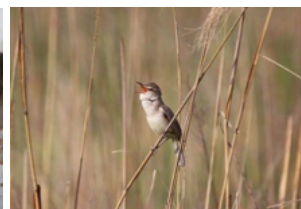
潟には多くの鳥類が飛来し、特にガンカモ類、サギ類が多種にわたって利用している。コハクチョウやオオハクチョウ、オオヒシクイ、マガモ、カルガモ、コガモ、オナガガモなどの個体数が多くなっている。

また、魚食性のカワセミやカイツブリ、バンなどが繁殖し、水面で魚を捕らえる猛禽類のミサゴも、ほぼ1年中見ることができる。

水辺のヨシ原では、オオヨシキリ、コヨシキリ、セッカなどの草地性鳥類が生息し、周辺の樹林には、アカゲラ、カッコー、オオタカ、ノスリ、フクロウなどの樹林性鳥類や、ホオジロ、モズなどの林縁性鳥類が生息している。



オオヒシクイ

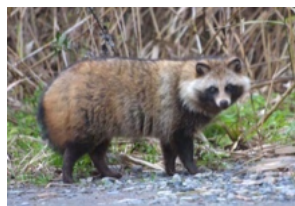


オオヨシキリ

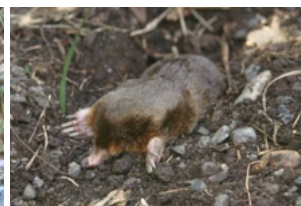
【哺乳類】

潟の湖岸の樹林地には、タヌキやイタチといった哺乳類が生息している。

また、ヨシ原などの草地にはハタネズミ、アカネズミが生息している。越後平野の中心部には大型のエチゴモグラが生息しており、平野辺縁部では東日本に広範に分布するアズマモグラとの間で分布域をめぐる勢力争いをしているといわれる。本市の潟周辺には、エチゴモグラが生息している。



タヌキ



エチゴモグラ

【爬虫類・両生類】

爬虫類としては、潟の中にはクサガメやスッポン、ミシシippアカミガメなどが生息しており、潟の周辺にはトカゲやニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウが生息している。

両生類は、ニホンアマガエルが潟や周辺の農地、市街地に広く生息しており、大部分の潟にウシガエルが生息する。アズマヒキガエル、ニホンアカガエルは非常に少なくなっており、トウキョウダルマガエル、ツチガエルは、近年ではほとんど見ることができなくなっている。



クサガメ



アズマヒキガエル

【魚類】

フナ類やヤリタナゴ、タモロコなどのコイ科魚類を主体に、ナマズ、ドジョウ、メダカなどの止水域を好む淡水魚が生息している。一部の潟では、今でもメナダやサケの迷入がある。



ヤリタナゴ♂



ドジョウ

3) 潟に生育・生息する外来生物について

近年では外来生物も多く確認されるようになっている。現在潟で確認されている外来生物のうち、特定外来生物(注2)に指定されている種としては、ブルーギル、オオクチバス、ウシガエルなどの動物や、オオフサモ、アレチウリ、オオキンケイギク、オオハングソウなどの植物があげられる。

また、ミシシippアカミミガメ、アメリカザリガニなどは、特定外来生物には指定されていないが、緊急対策外来種(注3)に指定されている。



オオクチバス



オオキンケイギク

注1) 環境省発行のレッドリストに記載されたカテゴリー

注2) 外来生物法に基づいて規制される。緊急に防除対策が必要な外来生物のこと。外来生物(海外起源の外来種)であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定される。

注3) 2015年3月、環境省及び農林水産省は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(生態系被害防止外来種リスト)」を発表した。このリストは、特に注意が必要な外来種をリスト化したものであり、「総合対策外来種」、「産業管理外来種」、「定着予防外来種」のカテゴリーに分類されている。「総合対策外来種」に指定されている外来種の中で、特に対策の緊急性が高く、積極的に防除を行う必要がある種を「緊急対策外来種」としている。

「越後平野の田んぼと潟、

コハクチョウとオオヒシクイのいる風景」

佐藤安男 潟環境研究所外部相談員／
水の駅「ビュー福島潟」事務局長



晩秋、田んぼに白い点々が見られるようになります。冬から春までこの地で暮らすハクチョウです。日本にはオオハクチョウとコハクチョウが越冬しますが、新潟へのコハクチョウの飛来は1万羽から

2万羽と越後平野はまさに日本最大の越冬地になっています。はるか4,000キロ離れたシベリアといわれる極東アジアから毎年忘れずにやってくる彼らは翼を広げると約2メートル、体重はなんと7キログラム程もあります。

大きな鳥といえば国の天然記念物のヒシクイ(主に亜種オオヒシクイ)も数千羽飛来生息しています。オオヒシクイは警戒心が強く黒褐色のこともあり目立たない存在ですが彼らも遠くカムチャツカ半島からやってきます。

両種とも越後平野の田んぼや水辺、潟の存在が大きく関係しているようで、主に潟などの水辺をねぐらに田んぼを採食地として、その間を毎日行き来して新潟の冬を乗り切ります。

彼らが当たり前のように田んぼや潟に集まり生活している風景は実はよその県ではなかなか見られないのです。採食地と安心できるねぐらがセットとしてある越後平野は、彼らにとって「食と住」をみたます生活の基盤になっているようです。

これまで新潟県水鳥湖沼ネットワークの仲間で各湖沼でのカウント調査を始めて17年目になりました。瓢湖や福島潟周辺に雪が降り積もり餌を採りにくくなると、雪の少ない鳥屋野潟や佐潟へ移動するという調査結果もでています。たとえ何らかのアクシデントがあっても、別な潟へねぐらを変えるなど越後平野の中を柔軟に生き抜いている姿に、見た目だけではなく美しさとしなやかな強さを感じます。

越後平野の風景は田んぼや水路、河川、公園や道路、建築物など様々な人のかかわりで維持され成り立っています。今後も人のかかわり方によって様々な変化していくものと思います。その際、コハクチョウやオオヒシクイが水辺に憩う風景を大切にしたいという発想はどうでしょうか。田んぼや潟がある湿地の環境は実は大きな価値があり、それは先達から託された新潟の財産でもあるように思います。ハクチョウが舞うこのふるさとの風景を子どもたちへ残していけたらいいなと。

新潟に田んぼがあり潟がある。それを誇りに思いながら、毎週金曜日早朝、カウンターを握り調査も頑張ろうと思います。

第2章 潟の変遷・歴史・暮らし文化

（1）潟の成り立ち

越後平野は、信濃川や阿賀野川をはじめとした大きな河川により運ばれてきた土砂が堆積してできた沖積平野（ちゅうせきへいや）である。沖積平野は、扇状地、後背湿地、三角州、海岸低地、自然堤防、海岸砂丘などのいくつかの地形に分けられる。これらの地形は、繰り返しおこった河川の氾濫にともなう土砂の堆積、平野の沈降、海面のわずかな上昇や下降などの現象が重なり合って、しだいに形成されていった。

江戸時代以降、放水路や排水路が掘られ、多くの潟が干拓されて農地になり、さらに一部は住宅地へと変わっていった。しかし、「潟」のもととなる後背湿地や池沼といった地形は、越後平野ができる中で形成されたものであるため、水をためやすいという性質をそのまま受け継いでいる。

1) 越後平野の古地理的変遷と「潟」

越後平野の形成史はいくつか提案されてきているが、ここでは、鴨井・安井(2004a,2004b)及び国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所編・小林巖雄監修(2007)に基づいて作成した、越後平野の移り変わりを示す古地理図を使い、平野の変化の様子をたどる(図1)。

越後平野では、これまでにたくさんの地質（ボーリング）調査が実施され、多くの資料が集められている。地質調査にともなうボーリングコア（注1）試料が得られるが、これを利用して、地層の種類や重なり方、含まれる化石を分析（注2）して地層が堆積した時の環境を調査し、年代測定（放射性炭素年代測定）が行われてきた。

古地理図は、地質調査の際に作られる地質柱状図をもとに、その地層が堆積した場所（環境）や時代を考えながら、いくつものルートに沿って地質断面図を作成し、それらを立体的につなげて作成する。地質断面図を作る際には、こうしたボーリングコアの分析結果が非常に役に立つ。

2) 古地理図に沿った越後平野の移り変わり

①約 20,000 年前

約20,000年前は非常に寒い時代で（専門家たちは、この時期を最終氷期最盛（最寒冷）期と呼んでいる）、北アメリカや北ヨーロッパで、南極大陸でみられるような厚い氷（大陸氷河）が発達した。そのため海水が減り、世界中の海水面が100メートルあまりも下がったため、海岸線は現在よりもずっと沖合にあった。このころの越後平野は、広い扇状地性の河原だったと考えられる。やがて氷期が終わって間氷期に入り、約15,000年前ころからだんだんと暖かくなり、海水面はしだいに高くなっていった。

②約 9,000～7,000 年前

約9,000～7,000年前になると、現在の越後平野の海岸寄りの部分は海水につかるようになる。そして、岩船から豊栄、亀田、角田浜にかけて、細長く海底に砂の高まり（砂州）ができはじめる。やがて、この砂の高まりがもとになって最初の砂丘（新砂丘I-1（注3））が形成された。そして、その内側に古塩津潟・古福島潟・古白根潟などの海水～汽水潟ができた。約6,000年前は、縄文海進期あるいはヒブシサーマル（最適温暖期）と呼ばれるもっとも暖かい時期で、海岸線が一番内陸まで侵入した時代である。この時の海岸線は吉田－燕付近にまで達していたと考えられている。

③約 5,000 年前

約5,000年前、阿賀野川の上流にある福島県の沼沢火山が噴火し、大量の軽石や火山灰が阿賀野川によって日本海へ運ばれ、河口に三角州を作り、一部は砂丘の材料になった。このころまでに越後平野中央部は土砂によってほぼ埋められ、泥炭（ヨシなどが堆積し炭化したもの）が堆積するような湿原や潟が広がり、現在の環境に近い状態が形作られた。

④約 3,000 年前

その後、新しい砂丘がづぎづぎに付け加わることによって、約3,000年前には海岸線が鳥屋野潟付近まで移動し、砂丘が広がった。平野の東側では水域が縮小し、加治川が河口を砂丘に塞がれて南下し、阿賀野川に合流していた。

⑤約 2,000 年前

約2,000年前にはさらに海岸線が海側に移動した。この時期は弥生の小海退（しょうかいたい）と重なるせいか、平野の西側では泥炭地が大きく拡大した。信濃川の河口は現在の新川付近にあった。一方、福島潟付近には湛水域（たんすいいき）が広がった。

⑥古墳時代（3世紀中ごろ～7世紀）以降

古墳時代（3世紀中ごろ～7世紀）以降になると、新砂丘Ⅲが大きく発達する。信濃川の河口は新砂丘Ⅲの成長とともに次第に東方へ追いやられ、現在の位置に移動した。一方、阿賀野川も砂丘で流路がふさがれ、砂丘間低地を通して現在の信濃川河口付近で日本海に注ぐようになった。二つの大河の河口が一つになり、越後平野の河口は北の荒川と信濃川の二つしかなくなった。そのことにより水はけが悪くなり、流域に湛水域が広がって沼沢地（しょうたくち）が所々に出現するようになった。

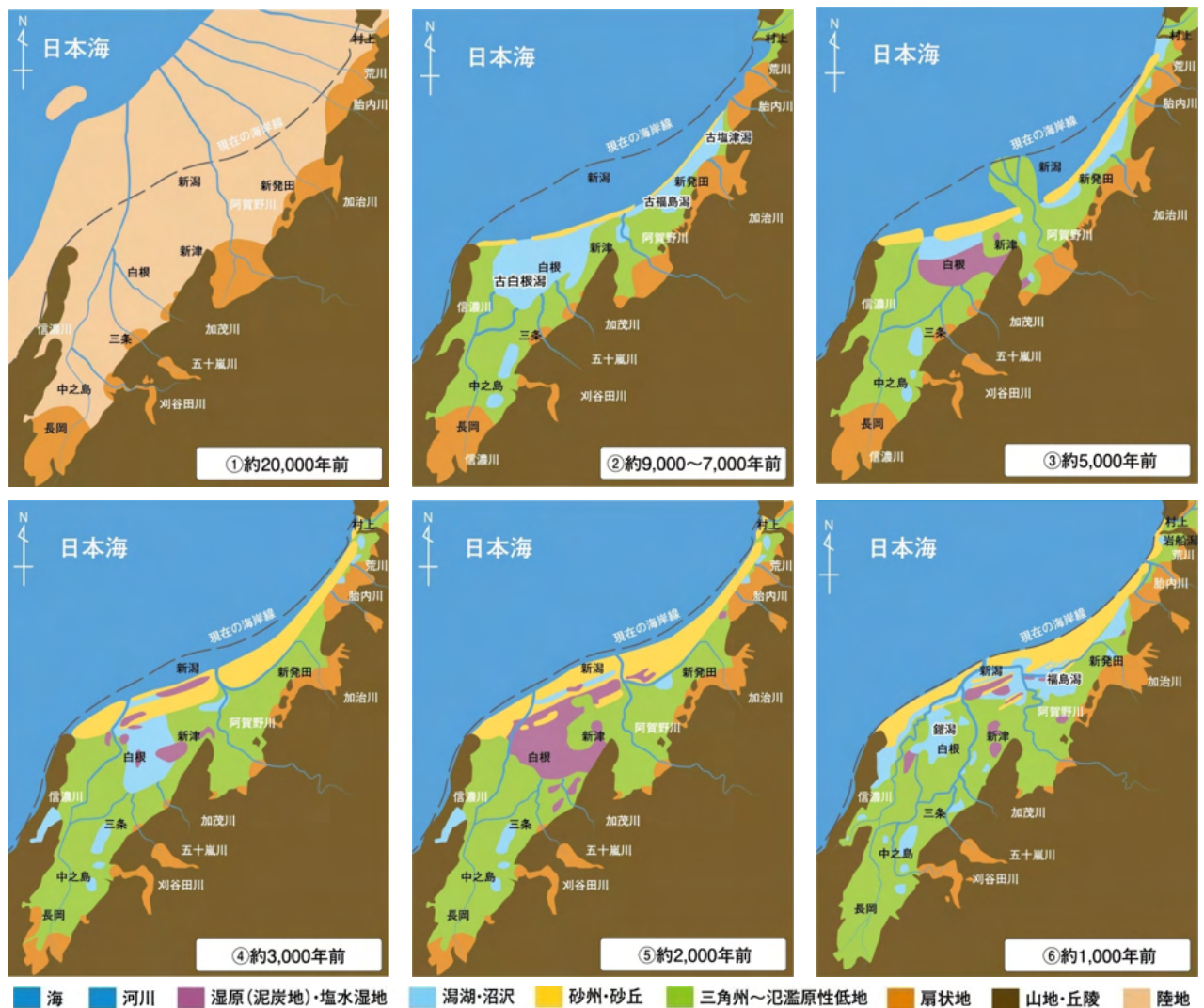
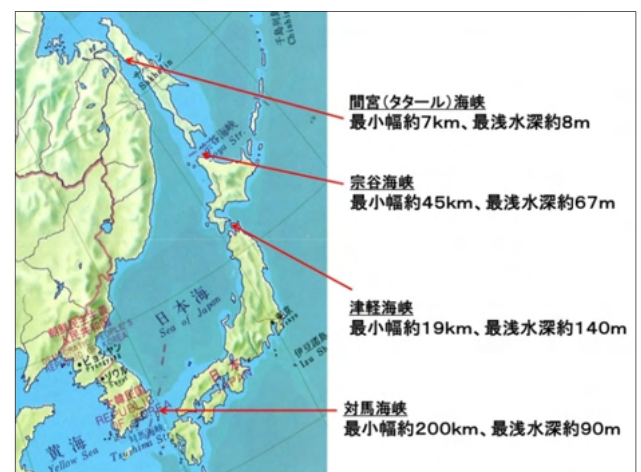


図1：越後平野の変遷（注4）

（参考1）

越後平野のもう一つの特徴として、日本海の干満差が小さいことがあげられる。日本海の出口にあたる海峡が狭く浅いため、新潟西港では大潮時でも干満の差が30センチメートル程度しかなく、太平洋岸の1～2メートルと比較して小さい。太平洋岸の平野では、干満差を利用して、満潮の塩水楔の上に乗る淡水を灌漑用水として取水したり、引き潮を利用して排水を行う方法で開発が進められたが、日本海側ではその開発方法が採用できなかった。結果として、数多くの放水路をつくることによって開発が進められることになった。



- 注1) ボーリングコア：試錐コア（しすいこあ）とも呼ぶ。地層から抜き取った円筒状の土の標本。
- 注2) 化石の分析：ボーリングコアには貝化石や植物化石など目に見える化石や、有孔虫（ゆうこうちゅう）や珪藻（けいそう）といった顕微鏡を使わないと見られない小さな化石がしばしば含まれている。これらを分析することによって、その地層がたまった時の環境を推定することができる。
- 注3) 新砂丘Ⅰ-1：新潟砂丘は、古い方から大きく新砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つに分けられ、さらに新砂丘Ⅰは古い方からⅠ-1～Ⅰ-4の4列に、新砂丘Ⅱも古い方からⅡ-1～Ⅱ-4の4列に、新砂丘ⅢはⅢ-1、Ⅲ-2の2列にそれぞれ区分され、全部で10列に分けられている。新砂丘Ⅰ-1は、もっとも内陸側にある、もっとも古い砂丘である。
- 注4) 鴨井幸彦・安井賢（2004a）越後平野の古地理的変遷 日本第四紀学会 2004 年大会講演要旨 34, 45-46 より引用、着色
鴨井幸彦・田中里志・安井賢（2015）暦年較正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し、第四紀研究 54(3), 139-143 より年代一部修正

〔参考2〕新潟砂丘と潟の成り立ちの関係

新潟砂丘は角田山麓から村上市瀬波まで約70キロメートルに及び、多いところでは10列からなり、幅は最大で10キロメートルにおよぶ。新潟砂丘はこれまでに、砂丘に含まれる有機物や砂丘間低地の腐植土の放射性炭素(^{14}C)年代測定によって、1列ごとに形成年代が推定されていたが、最近になって暦年較正(れきねんこうせい)(注1)が行われ、新砂丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの形成は、約6,000～4,500年前、約4,000～1,700年前、約1,700～1,100年前以降から、約7,600～4,800年前、約4,600～1,400年前、約1,800～900年前以降にそれぞれ修正された。

なお一般に、海岸砂丘は、河口から海に流れ出た土砂が、沿岸流に運ばれて海浜に堆積し、季節風によって吹き飛ばされて内陸側に作られた小高い丘とされる。しかし、新潟砂丘は、風成層(ふうせいそう)(注2)からなる厳密な意味での砂丘ではなく、海岸沿いに分布する砂層の地形的高まりであり、漠然と「砂丘」と呼んでいる。

この新潟砂丘の形成は、潟の成り立ちにとって大きな意味を持っている。一つは、この砂丘の形成によって越後平野の形・大きさが決まったこと。二つ目は、現在の海岸沿いに安定した厚い砂の地盤を堆積させ、人の生活の基盤となる土地を作ったこと。そして、三つ目は、排水の障害となって、内陸側に湿原や潟をたくさん作ったことである。しかし、広い低湿地帯ができたということは、逆に、干拓による広大な水田の開発を可能にし、今日の穀倉地帯の基盤を作ったと見ることもできる。

注1) 暦年較正(れきねんこうせい)：放射性炭素である ^{14}C は、一定の速度で壊れて ^{12}C に変わっていく。放射性炭素年代測定法は、この性質を利用したものである。大気中の ^{14}C は自然に減っていくが、窒素と宇宙線の反応によってたえず作られるので、減った分はすぐに回復する。しかし、大気中に含まれる ^{14}C の濃度はつねに一定ではなく、時代によって微妙に変化しているため、暦年代(西暦(AD)とか紀元前(BC))に置き換えた場合にズレが生じてしまう。これを補正する作業を暦年較正と呼ぶ。

注2) 風成層(ふうせいそう)：風の作用によって岩石の細片、砂、粘土、火山灰などが運搬され、堆積してできた地層

「越後平野と濃尾平野との地名比較」

大谷一男 潟環境研究所外部相談員／
黒崎南ふれあい協議会 会長



私たちが住む越後平野と地形の成り立ちが共通する濃尾平野において「場・潟・津」に関する地名の意外な共通点があることをご紹介します。

越後平野では、古津・新津といった約10か所の地名が、一方の濃尾平野は、愛知県だけでも内津・下津といった約15か所の地名が数多く見られます。さらに「場」の付く地名を拾って見ると、「津」と同様の共通性が見られ、越後平野では車場・子成場といった約30か所の地名が、一方の濃尾平野も石場・万場といった約35か所の地名を数えます。

このように地形の成り立ちの他に、地名についても全国に類を見ない共通性をもっています。「津」は内湾の舟着き場としての湊を意味します。「場」はある一定の場所を一般的に理解しますが、古代における場の意味は、中国の詩経国風：邶風編によると禾穀を治める庭、耕作地を示しています。越後平野と濃尾平野になんでこのような開墾地名が、一目瞭然と現れるのかが不思議です。

「場」と「津」の共通性を確認しながら、「潟」についてもその共通性を探ってみたいと思います。越後平野では、江戸幕府の成立以降、無数の潟や沼を埋めながら新田を開拓することによって「潟」の付く地名が、菱潟・道潟など約20か所に存在しています。また、女池などの地名も存在しています。一方の濃尾平野は、「潟」に類似する「池」の付く地名が、青池・蒲池など約30か所に存在し、さらに前潟という地名の他に、愛知県の語源になったと言われている古くからの年魚市潟(あゆちがた)も現に存在しています。

なお、濃尾平野の「池」は中世における新田開墾の産物であることから「場」と同様に開墾地名の一つとみることもできます。また、「潟」は日本海側に多く存在していて、太平洋側の「池」との比較で違いはあるものの、その共通性に驚愕を覚えます。

いずれにしてもこれらを俯瞰してみると、地名はその土地の成り立ちを表わす共通の文字を使用しながら、目印としての地名を発生させたことが分かります。



砂丘列の分布「新潟市史資料編 12 自然」より作成、一部改変

(2) 潟の開発の歴史

1) 越後平野の低湿地～「ヤチ」と「ヤマ」～

弥彦のご祭神、天香山命(あめのかげやまのみこと)が越後に来て弥彦山に登り、四方を遠望した際、当時の越後平野の様子を「水沼の蒲原(みずぬまのがまはら)」と称したという話がある。古代から中世中頃まで、越後平野のほとんどの地域は、この地方の方言で低湿地をさす「ヤチ」であったと考えられる。人々はこの湛水部分を伴う沼地に近い環境の中で、洪水に見舞われることのない砂丘上に住居を構え、舟で移動して耕作をしていた。

戦国時代中期頃においても、越後平野の開発は洪水の難を避けることのできる微高地に限られた。人々は「ヤマ」と呼ばれる自然堤防や砂丘上に集落をつくり、囲い土手をめぐらし、洪水から家と田畑を守るようにしていた。

2) 越後平野の開発の始まり～米の石高を増やすために～

越後平野の開発が急速に推し進められるようになったのは、戦国時代末期から江戸時代前期にかけてである。越後平野は新発田藩、長岡藩、村上藩、その他幕府直轄領を含めた多くの藩が領地としており、利害が交錯していたため、開発が思うように進まない状況であった。しかし、6万石の領地のほとんどが水害常襲地帯にあった新発田藩が、その石高を増やすべく、越後平野の開発に着手したのである。

このような洪水の氾濫原(はんらんげん)(注1)を開発するためにまず必要だったことは、氾濫原の水抜きのための瀬替え(せがえ)(注2)に始まり、潟の干拓を目的とした放水路を整備することだった。これにより、水田の面積が増加し、更には米の石高を増やすことができたのである。

3) 近世における越後平野の開発

近世中期以降、越後平野では大規模な土木工事を伴う新田開発が行われた。その代表的な大型開発の一つに、海岸砂丘の後背湿地に広がる紫雲寺潟(塩津潟)の開発があげられる。1730(享保15)年に開削された松ヶ崎堀割(まつがさきほりわり)は、この紫雲寺潟の干拓にともない、水害が激化する地域に対する補償工事であったが、この堀割は、翌年の雪代洪水で破壊されて阿賀野川の本流となった。これが現在の阿賀野川河口になる。

また、1820(文政3)年に開削された内野新川は、大潟(おおがた)、田潟(たがた)、鎧潟(よろいがた)周辺の排水と新田開発が目的であった。この三潟地域は雨が降ると、流れ出ると

ころのないまま溜まり水となっており、大雨の時などは、田畑までこの「悪水」が押し寄せ、作物に大きな被害をもたらした。何度も襲ってくる水害から逃れるためには三潟の悪水を日本海に放出するしかなく、この新川が開削されたことにより、潟縁が徐々に水田化されていった。

4) 近代から現代の越後平野～“乾いた”田んぼの実現～

近代に入り、米を増産するため、蒸気機関による動力排水機場の設置といった、近代的な技術が活発に導入されるようになっていった。しかし、越後平野で抜本的な信濃川治水工事が始まったのは、1896(明治29)年7月に起きた「横田切れ」と呼ばれる大水害の後のことである。この横田切れを契機に大河津分水が作られ、洪水は激減し、越後平野では用排水路の整備や潟の開墾などの土地改良事業が本格化していった。その後、日中戦争や太平洋戦争などにより、労力の不足による食糧不足が深刻化していったことから、国家が直接各地の土地改良事業に資金を投入し、農業基盤を整備するようになっていった。

第2次世界大戦後の食糧増産政策のもと、1948(昭和23)年には栗ノ木排水機場(注3)、1953(昭和28)年には新川右岸排水機場と、国・県営の大排水機場が次々と運転を開始していった。これに合わせて耕地整理・土地改良が実施され、1960年代には土地造成がされた。

越後平野最後の大潟湖であった鎧潟が1968(昭和43)年に全面干拓され、福島潟の約半分が1975(昭和50)年に干拓されるなど、大規模な干拓事業が行われたのもこの頃である。

これらは従来の潟縁への進出とは異なる、近代的な土木技術を活用したものであり、かつて越後平野の特徴的な景観のひとつであった多くの潟やヤチは、鳥屋野潟、福島潟などのごく少数の潟を残し、用排水路の整備された耕地へと変わっていった。

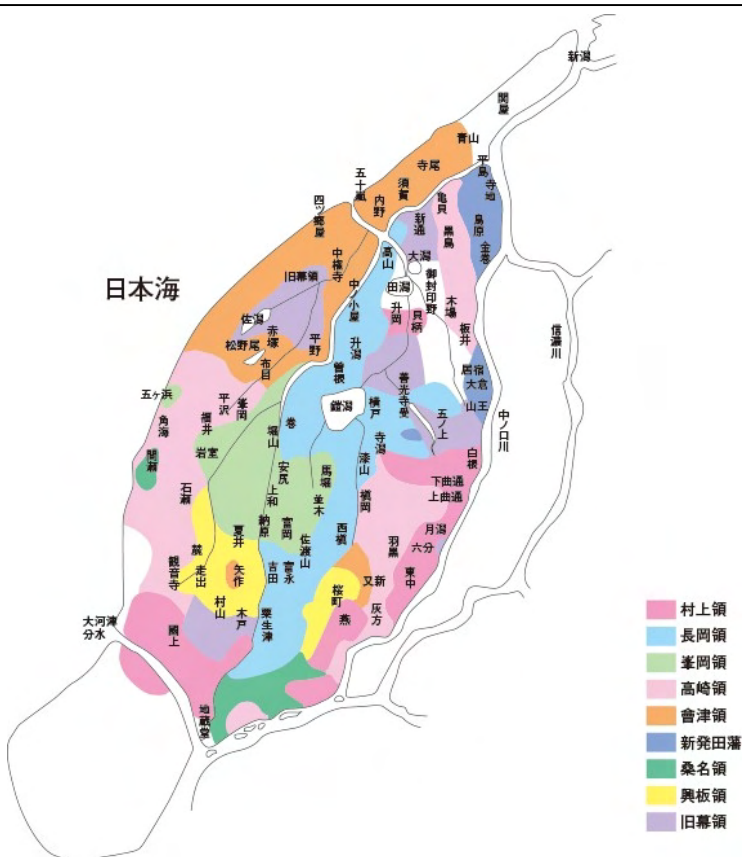
食の多様化によって米余りが深刻化し、日本の農政が減反政策へと大きく切り替わったのは1970(昭和45)年頃のことである。この政策転換により、水田は水稻以外の作物への転作が図られ、その一方で、住宅地、商業地、公共用地に転用されるなど都市化が進展していった。

現在は農業生産向上の為に圃場整備が進められると共に、冬季湛水や田んぼダム、環境用水の導入を通じた水質浄化や生物多様性の確保など、環境保全型農業の多面的機能への取り組みによって、農業農地のさまざまな方向性が模索されている。

注1) 氾濫原(はんらんげん): 洪水時に、流水が河道などからあふれ出て、氾濫する範囲の平野部分のこと。すなわち谷底平野・扇状地・沖積平野・三角州などのうちで洪水が浸水する範囲全部を指す。

注2) 瀬替え(せがえ): 新しく河道を掘削して、河川を付け替える工事のこと。

注3) 現在は、栗ノ木排水機場はなく、1968(昭和43)年に完成した親松排水機場がその機能を引き継いでいる。



西蒲原郡旧藩領地分布図（幕末）
「西蒲原土地改良史 上巻」より作成

図の示すとおり、藩の領域は複雑で、鰐潟から田潟、大潟へ流れこむ早通川の右岸一帯は、洪水時における遊水池であった。ここは幕府によって開発が禁止されていた区域であり、「御封印野」と呼ばれていた。



「越後平野の放水路概略図」原図・大熊に追加

現在の河口は20である。東部組合悪水路は崩壊して存在せず。



現在の内野新川立体交差



栗ノ木排水機場（1948年完成）
所蔵：亀田郷土地改良区



昔の農作業の様子
撮影：本間喜八 所蔵：亀田郷土地改良区



水の駅「ビュー福島潟」屋上から見た
福島潟放水路



①新樋曾山隧道 ②新々樋曾山隧道

「環境用水導入による潟環境の向上へ」

藤井大三郎／都市政策部田園まちづくりアドバイザー



新潟市は平成19年度より環境用水の水利権を取得し、新潟市の亀田郷西部地区において農業用排水路の水質、景観、生態系の保全を通じ、地域のにぎわいの創出や水と緑のネットワーク再生を進めることを目的として、非灌漑期に環境用水を通水しています。

導水経路は信濃川より舞潟排水機場で取水し、西線用水路、東線用水路から大堀排水路、新堀排水路、鍋潟排水路、清五郎排水路を経由して鳥屋野潟へ導水しています。

最大取水量は2.09立方メートル毎秒で農業用水の終了した非灌漑期の9月11日から翌年の4月23日までステージごとに取水量が決められています。

この地域では鳥屋野潟をはじめ豊かな水辺空間が形成されており、多様な昆虫類、魚類、鳥類が生息しています。特に導水経路にある清五郎排水路にはモツゴ、スジエビ、ヨシノボリ、タイリクバラタナゴなどの魚類が生息しています。

しかし非灌漑期になると農業用水が河川から取水されなくなるため、水路の流量が著しく減少し、農業用排水路の水質悪化やごみの滞留が問題となっています。

年間を通じて通水することにより、こうした生物の越冬空間が確保され豊かな生態系の保全に繋がります。

環境用水による水環境再生を通じて地域資源を最大限に活用し水質改善・親水利用・生態系保全が図られ四季折々の田園の恵、水辺の価値向上、水鳥飛び交う田園都市が実現することに貢献します。

平成28年度は環境用水水利権の更新年に当たり、3年間（平成28年9月～平成31年4月）の水利権を新たに取得しました。

今後は治水の安全を基本に、地域の実態に即し、「新潟市内の潟へ環境用水を導入し潟環境の向上を実現」するために、潟環境研究所に集う皆さんと気持ち良い汗と水を流していきましょう。

新潟市亀田郷西部地区 みずゆめマップ



①取水源となる舞潟揚水機場



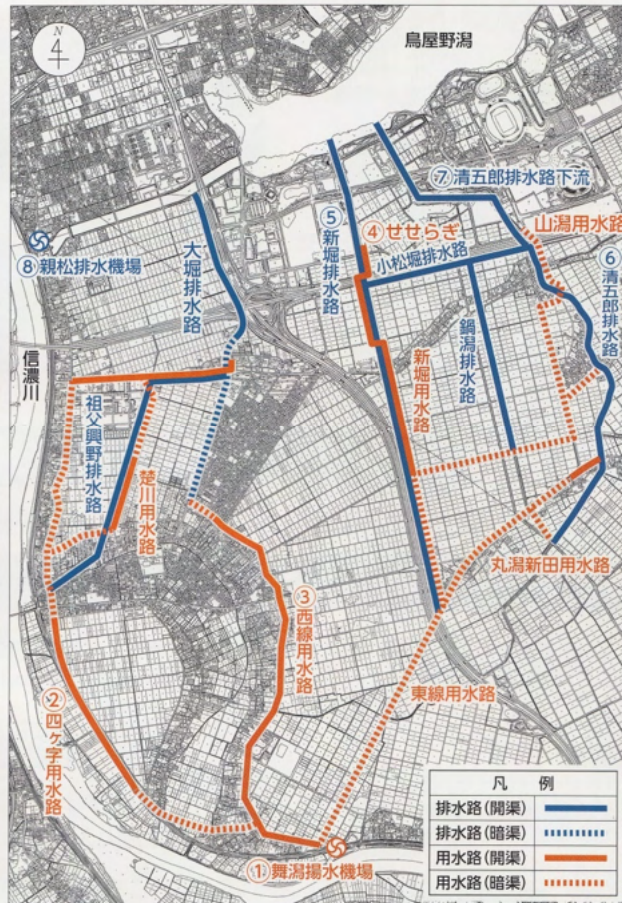
②のぼり旗設置水路



③小魚がいる水路



④せせらぎのある散歩道



この地図は、新潟市の承認を得て、新潟市発行の2千5百分の1地形図を複製したものである。
(承認番号) 平28 新第250号の2



⑤釣り人でにぎわう水路



⑥親水と生態系に配慮した水辺



⑦植物による水質浄化



⑧排水の要となる親松排水機場

（3）潟の生業

1) 生業～潟は生活を支える場だった～

生業とはいわゆる「生計を立てていくための仕事」「生活を営むための仕事」のことである。潟の周辺に住む人々は潟の豊かな環境、潟から得られる恵みを、知恵を働かせ、さまざまな形で利用し、収入を得ていた。潟の生業として関わりが深いものは、漁業、農業、狩猟などが挙げられるが、その他、潟の植物を加工し販売するなどもしていた。

このように潟の周辺に住む人々にとって、潟は仕事をする場所、日々の生活の基盤を支える場所としてとても重要だった。

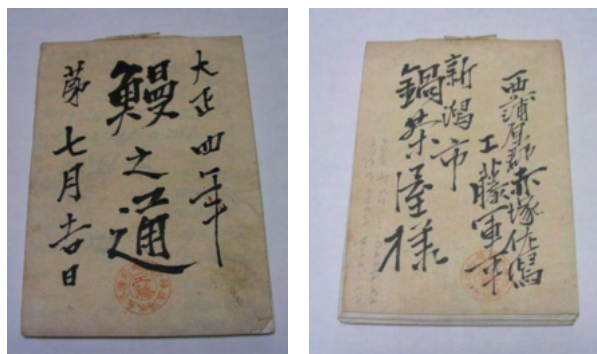


鎧潟の風物詩 ヒシ採り
撮影：石山与五栄門 提供：斉藤文夫

2) 漁業～潟は魚の宝庫だった～

昭和30年代頃まで、漁の目的は自分たちで食べるだけでなく、コイやフナなどを捕って行商で売ったり、仲買人に売り現金収入を得ることだった。また、川を通じて海とつながっていた潟では、海から上がってきたボラやメナダ、マハゼやスズキなどの海産魚や、サケ、ワカサギ（地方名シロヨ）などの回遊魚も捕れていた。

ウナギの天然遡上はごく希であったが、高値で取引されるため、佐潟では明治初期から稚魚の導入が行われた記録が残っている。かつて佐潟のウナギは名産品として知られており、新潟市内の料亭に卸されていたことも文献に残されている。



ウナギを鍋茶屋に納めた帳簿「鰻之通」
所蔵：赤塚公会堂 左：表紙、右：裏表紙

しかし昭和40年代以降、生活排水や産業排水が潟の中に入り込み、水質が悪化し、漁獲量は低下していった。近年では下水道の普及など地域住民の努力により水質が改善され、再びコイやフナなどが食用に供されるようになってきている。

3) 農業～田を維持する潟の土～

潟の底に堆積した土は「ベト」「ゴミ」などと呼ばれ、養分を含んでおり田んぼの肥料としても使われた。低湿地の田んぼでは常に水が溜まり、排水に苦心していたため、少しでも田んぼを高くしようと、潟の底土を田んぼに入れるという作業を行っていた。7月になると農家が総出で舟に乗り、「ジョレン」と呼ばれる道具で、潟の底土をすくい、舟に水が入りそうになるギリギリまで大量の土を積んで陸地に上げたと言う。陸地に上げて乾燥させた土を春になり田の水位が上がると、田んぼのかさ上げや肥料として田の中に撒いた。

しかし、昭和20～30年代頃に大型排水機場が造られ、用排水路が整備されて乾田化が進むと、次第に潟や川から土をさらって田に入れる作業の必要性がなくなり、このような作業は行われなくなっていった。



鳥屋野潟のジョレンかき 所蔵：亀田郷土地改良区

4) 狩猟～潟周辺の水鳥は特産品だった～

潟にはガンやカモ、ヒシクイなどの水鳥が飛来する。現在、新潟市内の鳥屋野潟、佐潟、福島潟は鳥獣保護区に指定されており捕獲が禁止されているが、保護区に指定される昭和半ば以前は、潟周辺に住む人々は潟に飛来する水鳥を捕獲し売っていた。

狩猟は鉄砲を用いて行うことが多かったようだが、例えば、仁箇堤（西蒲区）では、昭和30年代頃まで「サカアミ（サカウチアミ）」という網を投げて、飛来する水鳥を捕獲する伝統的な猟も行われていた。

江戸時代、赤塚（西区）の佐潟周辺で捕れた水鳥も特産品として知られ、1864（元治元）年発行の『越後土産初編』「産物見立取組」の中には、前頭として佐潟の「赤塚坂鳥（あかつかさかどり（ばんどり）」が記されている。

「16 潟を俯瞰して考える。民俗学からみた潟」

森 行人 潟環境研究所外部相談員／新潟市歴史博物館（みなとぴあ）学芸員



かつては新潟市域の各地に多くの潟があり、地域住民の生活において重要な役割を果たしてきた。民俗学の分野では、特に潟周辺の生産活動について福島潟・鎧潟などで詳細な調査が行われた。昭和20年代ごろまでの民俗事例によれば、潟端の集落では潟に生息する様々な魚種を対象に、刺し網や扇網などさまざまな網を用いた漁や、スダテやヤナなどいわゆる魴漁（えりりょう）、延縄漁（はえなわりょう）、釜漁（うけりょう）など、多様な漁具を用いた漁撈を行った。狩猟では、冬季に飛来する水鳥をカスミ網やトリモチで捕えたり、潟端に設置した小屋から猟銃で打ったりした。採集では、ハスやヒシの実が食用に、ヨシやマコモはくらしや生業の道具の加工原料に、潟の水底に堆積するゴミ・ガスはジョレンで船に掻き上げ、低湿地の水田に投入して田面のかさ上げに利用してきた。

潟の動植物の直接利用だけでなく、水田稲作も潟との関わりを持った。潟は大規模干拓によって広大な新田となり、小さな潟やその周辺の低湿地では、人々は湿性遷移を利用しつつ客土などを行うことで田を開墾し、カヤアゼやホリアゲといった技術で田を維持した。水田とは湿地を置き換えた二次的自然であり、広大な水界であった。水田や堀には潟や河川の様々な魚類が入り込み、数が多いドジョウ・フナなどは、釜や手持ちの網など簡易な漁具で捕えることができた。

こうした農業や漁業といった経済的な区分では捉えきれない人々の営為から、民俗学では稲作のプロセスが水田を場とする漁撈などの生産活動と連関すること、さらに遊びや楽しみといった看過されがちな側面も重要であることを描き出してきた。

この時代の人々は低湿な環境を深く知り、細やかな働きかけを通じて生計を立ててきた。持続的な関係をつくる民俗知や技術の体系は、今日ワイズユースとして見直されている。しかし現代、潟との関係は一方的な保護としてのみ成立するように見える。その点で、形成過程も来歴も多様な16潟の存在は大きな意味を持つ。それぞれの潟と人の関わり方を対象化し、現代の私たちの自然観を知ること、潟の自然と私たちの自然観が共に豊かさを育む方法を作り上げることができるのではないかな。

<写真について>

新潟市歴史博物館では、潟を含めた低湿地における農耕や漁撈、狩猟、採集等に用いられた民具を収集し、これらを使用したくらしや生業の聞き取り調査を行っている。

写真1：鳥屋野潟の漁の調査。鳥屋野潟漁業協同組合の方々に協力をいただき、刺し網の追い込み漁の記録を行った。

写真2：鳥屋野潟の漁で使われた漁具「扇網」。同組合長増井勝弘氏からご寄贈いただいた。

写真3：平成27年度に当館で開催した展覧会「田んぼで魚とり」の展示風景。鳥屋野潟の扇網。低湿地の民俗調査・民具収集の成果を活用して開催した。

写真4：扇網を使った漁の再現。新潟市潟環境研究所の事業で、再現した漁の調査を行った。

写真1



写真2



写真3



写真4



「潟と農業」

宮尾浩史 潟環境研究所外部相談員／宮尾農園 代表

明治生まれの祖母は「嫁に来た頃胸までつかって田植した」と聞かせてくれた。

私の家は福島潟から数キロのところにあり、農業をなりわいとしている。

現在、田んぼは乾田化され、トラクターや田植え機やコンバインに乗って、胸どころかスニーカーが汚れることもないほどだ。

土地改良を施し、排水をし、水位の落差、地形の落差を作って、排水位、地下水位を下げたことで田んぼを乾田化してきた。先人の努力と熱意のたまものである。

乾田化と機械化、化学肥料、農薬の出現は農家を豊かにし、新潟を米どころとして有名にした。

しかし、水路はコンクリートや鉄の矢板で護岸され、田んぼでは農薬、化学肥料が使われ、人々の生活からは化学物質や栄養価に富んだ水が排水され、ホタルやトンボ、タニシ、タナゴ、メダカ、コウモリ、スズメ、サギ……いろいろな生きもの、名もない植物は激減した。生きものと共にあった豊かな農村風景はなくなってしまった。

こんな状況を天国の祖母はどんなふうに見ているだろう。

私は農薬、肥料を使わない自然栽培で稲を育てている。

自然栽培の田んぼではゲンゴロウ、オタマジャクシ、タニシ、ヤゴ、ドジョウ……いろいろな生きもの、いろいろな植物がいっぱいだ。

地球温暖化を引き起こす二酸化炭素やメタンガス。農地や、牛のゲップからの影響が指摘されている。

田んぼや畑に投入される肥料（化学肥料ばかりでなく有機肥料であっても）の7～8割は排水や地下に流亡するか、大気中に揮散する。

しかし肥料を施さない自然栽培は、大気や、水を汚染するリスクが非常に少ないのだ。更に湛水状態の田んぼでは光合成細菌類が炭酸ガスを吸収し酸素を生み出す。それで田んぼの溶存酸素量が多くなりいろいろな生きものの生存を可能にしている。光合成細菌類が放出する OH⁻イオンでアルカリ性になった水面付近では二酸化炭素が吸収される。

田んぼの排水は川へ、そして潟へ流れ込む。こんな農業が潟の上流部でたくさん行われたら良いのではないか。

新潟周辺で自然栽培を実践する人が増えている。農業総合研究センターや、普及センター、大学の先生や研究者、農業系専門学校との連携、協力で学びの場ができています。新規就農者や、若い農業者を中心に環境と調和した農業を求める人が多い。

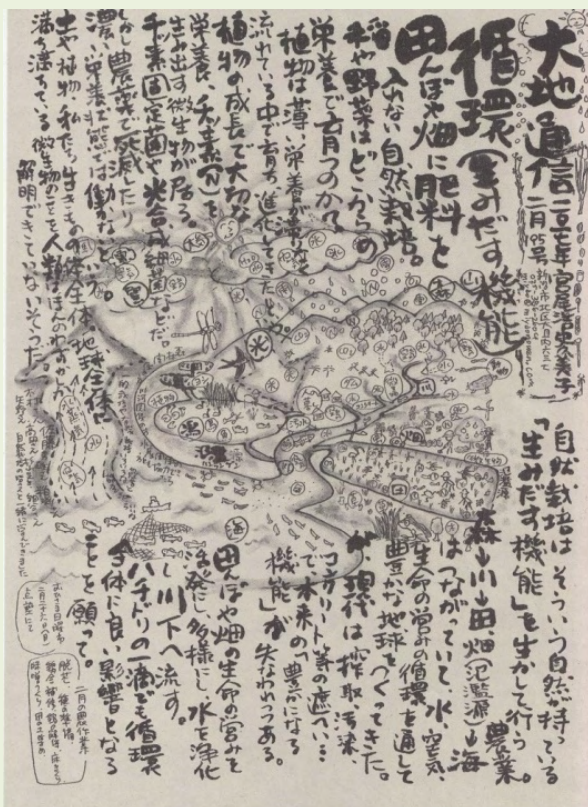
消費者にも安全安心な農作物、丁寧な暮らしを求める動きがひろがり、それにともなって、いくつかのオーガニックマルシェが新潟市内で定期的にかかれるようになった。

自然栽培の田んぼや畑ではトンボやツバメ、いろいろな生き物、いろいろな草、植物が豊かになり、農家やその家族、そこを訪れる消費者は生きものとの調和を認識し喜びを感じる。

いろいろなことが関係しあって、生産者の増加、消費のあり方に影響を与えてきた。

人々の意識、潟周辺の田んぼも含めた流域全体が持続可能な方向に向っていくことができればと願う。

環境と調和した農業が誰にでも実践可能な技術となるよう深めていくことを通して、潟、流域全体の環境の改善に貢献したいと思う。



(4) 潟の暮らし文化

1) 潟の食～潟の恵みを享受する～

潟周辺に住む人々は、潟で捕れる魚を日々の糧としていた。代表的なものとして、フナ、ドジョウ、ナマズ、コイなどが挙げられる。これらの魚の調理方法として一例をあげると、竹串に刺し、巻きわらに刺して囲炉裏の煙でいぶし、しょうゆや砂糖味噌を付けたりしていた。また、「コイやフナを食べれば、乳の出が良くなる」といわれていたため、産後の女性がいる家では、これらの魚を甘露煮や味噌汁にして食べていた。



焼いた魚を刺して保管する



フナのすずめ焼き

魚以外でも、水鳥や潟に生育する植物も同じように日々の糧とされていた。潟へ冬季に飛来する水鳥は、身が締まり、小さければ小さいほど美味しいといわれ、捕獲したカモやバンは正月料理などの吸い物として振る舞われていた。

潟に生育する植物では、間引きしたオニバスの葉柄を味噌汁の具に、ハスの根はレンコンとして料理の材料になった。また、子どもたちのおやつとして、ハスの実生はそのまま食され、ヒシの実生は殻ごと茹でて殻を割って実を出して食べられていた。

このように潟から受けるさまざまな恵みにより、想像よりはるかに豊かな食生活、食文化を築いていたといえるだろう。

2) 潟の舟～潟では舟一艘あれば生きていけた～

水はけの悪い低湿地に住む人々にとって舟は必要不可欠

なものであった。男たちは舟を漕いで潟で魚を捕り、女たちも舟を操って潟の中に生えている植物を採っていた。また、舟に乗り潟でとれたものを市(いち)に売りに行っていた。出掛ける際の交通手段としても舟を利用していた。

農業の面でも、舟はとても重要だった。農作業をする人々の移動手段としてはもちろんのこと、運搬用具として田植え用の苗や刈り取った稲、肥料になる潟底の土などを運ぶ、現在のトラックのような役割も果たした。

このようなことから、舟は人々の生活や潟での経済活動においても重要であったことがわかる。「潟では舟一艘あれば生きていけた」といわれているが、まさにその言葉がすべてを物語っているといえるだろう。

また、舟は子どもたちの遊び道具としても使われた。子どもたちは舟で潟の真ん中まで行き、舟底を引っくり返して飛び込み台にしたり、空気溜まりを利用してかくれんぼをしていたという。

かつて鳥屋野潟で遊んだ人々の話では、潟の中央から向こう岸まで泳ぎきらないと仲間から一人前として認められなかったそうだ。遊びながら泳ぎを覚える、舟は大人だけではなく子どもたちが成長する大事な遊び道具でもあった。



上堰潟 ドロ揚げのために多くの舟が出る
撮影：石山与五栄門 提供：斉藤文夫

3) 潟の伝説～潟には大亀や大蛇がすんでいた～

潟周辺の集落には水に関わる生き物の伝説が多く残っている。潟に大亀や大蛇がすむとされ、勝手に潟を埋め立てたり、無断で魚を捕ろうとすると罰が当たるといわれていた。人々の水に対する畏敬の念がうかがえる。

いくつかの代表的な伝説をあげると、「鳥屋野潟」には大きな亀が住んでいて橋を架けようすると邪魔をしたという伝説、「福島潟」には長者の娘のお福が 恋い焦がれたお坊さんを追いかけたうえ、共に紫雲寺潟に落ち大蛇と化した「お福大蛇」が福島潟に移ってきたという伝説、佐潟には海賊船が埋まっているという伝説、今はなくなった鎧潟には、源義家が地元の豪族・黒鳥兵衛(くろとりひょうえ)を討つためにやって来たとき、鎧を潟で洗ったので「鎧潟」と名付けられたなど、このほかにも数多くの伝説が残っている。

第3章 調査対象とする16の潟



16の潟の配置図

北区	1	福島潟（ふくしまがた）
	2	内沼潟（うちぬまがた）
	3	十二潟（じゅうにがた）
	4	松浜の池（まつはまのいけ） ／ひょうたん池（ひょうたんいけ）
東区	5	じゅんさい池（じゅんさいいけ）
中央区	6	鳥屋野潟（とやのがた）
	7	清五郎潟（せいごろうがた）
江南区	8	北山池（きたやまいけ）
秋葉区	9	六郷ノ池（ろくごうのいけ）
	10	北上の池（きたかみのいけ）
西区	11	佐潟（さかた）
	12	御手洗潟（みたらせがた）
	13	ドンチ池（どんちいけ）
	14	金巻の池（かねまきのいけ） ／水戸際池（みとわいけ）
西蒲区	15	上堰潟（うわせきがた）
	16	仁箇堤（にかつつみ）



16の潟のかたち

国の天然記念物オオヒシクイの日本一の越冬地

福島潟（ふくしまがた）

位置：新潟市北区新鼻甲ほか・新発田市／面積：約 262ha／水面標高：T.P.[※] -0.7m／水源：河川／成因：潟湖（海岸砂丘で閉塞され、海面の低下とともに平野の低地に残された水面）

※）T.P.：東京湾平均海面(Tokyo Peil)



■潟の概要

福島潟は、新潟市北区と新発田市にまたがる 262 ヘクタールの新潟市最大の潟である。

福島潟は、その昔形成された新潟砂丘により阿賀野川などの河川の流れが遮られ、さらに砂丘列の内陸側に徐々に土砂が堆積し、約 2,000 年～1,000 年前に形づくられた。1680（延宝 8）年頃、面積は約 5,800 ヘクタールあったと伝えられている。

福島潟の干拓の歴史は江戸時代中期にまでさかのぼる。1730（享保 15）年に開削された松ヶ崎堀割がきっかけとなり、周辺の新田開発のための干拓事業が進んだ。昭和に入り、国が市島家から潟を買収した後、1961（昭和 36）年の新井郷川排水機場の完成を契機に、1968（昭和 43）年に国営福島潟干拓建設事業が始まった。その結果 169 ヘクタールが干拓され農地となり、1975（昭和 50）年、福島潟の面積は 193 ヘクタールとなった。

現在、福島潟の周囲は治水目的で堤防の造成が進んでいる。この堤防の一部は、新潟県が買収した潟周辺の水田約 80 ヘクタールを潟にとりこむように造られ、水田部分を掘削し、水面を広げ、過去に干拓した場所を再び潟として復元している。

現在の福島潟には 13 本の河川が流入し、新井郷川から流出しているが、洪水時には福島潟放水路からも排水される。

■景観的特性

潟の浅い水域にヨシ帯が島状に広がり、越後平野の原風景を思わせる。春には整備された菜の花畑と雪をかぶった山々が潟の景色を彩る。新潟県が主体となって行う福島潟河川改修事業の一環である湖岸堤の整備（2014 年～2015 年施工）では、「水の公園福島潟」の公園内における堤防法線が既存計画から変更された。このことにより、潟を訪れた人に堤防を超えているという感覚をあたえずに、潟の

水辺に近づくことができ、五頭連峰や飯豊の山々を背景とする福島潟の特徴的な風景を損なわない設計となった。

この堤防は 2016（平成 28）年、土木学会景観・デザイン委員会デザイン賞の奨励賞を受賞した。なお、1999（平成 11）年に日本建築学会賞を受賞した青木淳氏設計の「ビュー福島潟」も訪れる人の目印となっている。



早春の福島潟

■福島潟の動植物

福島潟は国の天然記念物の渡り鳥、オオヒシクイの日本一の越冬地である。また、220 種以上の野鳥や 450 種以上の水生・湿性植物などが確認されている。現在全国で 70 か所程度しか生育が確認されていない希少な植物・オニバスが自生している。

■潟での漁

かつて、福島潟ではスダテ漁、カブセアミ漁、「ザイボリ」と呼ばれる氷上追い込み漁など様々な漁法による漁が行われていた。淡水魚のほか、かつてはサケのような回遊魚や汽水・海水魚も獲れたが、新井郷川排水機場の完成でこれらの魚は姿を消した。また、昭和 30 年頃を境に、農薬流入など環境悪化で漁獲量・漁獲種も激減し、福島潟の漁業は大きく変化した。しかし、水質が改善された近年、フナ、雑魚、モクズガニ等の漁が地元漁師により続けられている。



福島潟で獲れたモクズガニ（左）

かつて魚を捕るために使用されていたヨウモツゴヤ（右）

■福島潟に関する諸活動

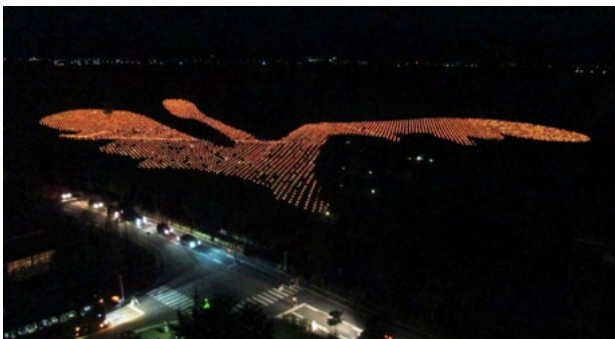
福島潟のほとりに建つ、水の駅「ビュー福島潟」（1997（平成9）年完成）は、自然と文化を包括した「自然文化」という新しい自然保護のコンセプトのもと運営され、年間約90件の学校向け環境学習のほか、来館者向けのガイドを行っている。

また、福島潟を舞台に、市民団体による潟の環境保全活動や潟を楽しむ活動として、菜の花畑の迷路や潟舟の乗船体験、昆虫・植物・野鳥の観察会などが行われている。



潟舟体験（上）、ヨシ焼き（左下）
オオヒシクイ観察会（右下）

例年3月頃に、福島潟環境保全対策推進協議会が、潟の環境保全のため潟中のヨシ原に火入れをする「新芽呼ぶヨシ焼き」を行っている。また、毎年9月秋分の日、年間最大のイベント福島潟自然文化祭では、1万本を超えるロウソクを使い、地域の人々や子どもたちの手によって、オオヒシクイが描かれる「雁迎灯（かんげいび）」が行われる。オオヒシクイを福島潟のシンボルとし地域や子どもたち、団体、行政が協力して行われる事業の存在が福島潟と人との関わりを象徴している。



雁迎灯

「潟にはまる」

安澤裕志

NPO法人ねっとわーく福島潟 事務局長



福島潟には、いろんな人がやって来ます。スケッチブックを開いて絵を描いている人、俳句をよんでいるグループ、水辺を散策するカップル、ザリガニ釣りに夢中になっている家族連れ、寒さの中で

望遠鏡を覗く野鳥観察の方、カメラに三脚を抱えた写真愛好家のみなさん、ふらっとやって来た観光客の方。そんな多様性をすべて受け入れてくれるのが福島潟です。

ここの風景や人柄が、やってきた人たちの心の原風景と共鳴するのでしょうか、一度訪れると、また来たくなる。そんな魅力を持っているようです。

7年前、自分たちで舟を作っているグループがあると聞き、福島潟へ見に来たところから私と潟との関わりが始まりました。本当に人の乗れる舟で、その舟で潟の案内をしているということでした。何度か遊びに行くうちに次第に「はまって」いきました。水面から見る景色は新鮮なものがあります。水や風を肌で感じ、広大な湖面に身をおくと、ゆったりと流れる時間を実感できます。そんな体験を、みなさんにもしていただきたくて潟舟による潟案内を続けています。きっと、みなさん「潟にはまって」くださることと思います。

当法人は希少種植物の保護をやったり、園地の草刈をやったり、来訪者のご案内をしたり、オオヒシクイの越冬行動調査をやったり、いろんなことをやっています。

『わたしたちは、かけがえのない福島潟をいつまでも残し、みんなにつたえます』が「ねっとわーく福島潟」の合言葉です。



潟舟の製作（上）と完成した潟舟（下）

昔は福島潟とつながっていた小さな潟

内沼潟（うちぬまがた）

位置：新潟市北区内沼／面積：約1.15ha／水面標高：T.P. - 0.6m／水源：河川／成因：潟湖（海岸砂丘で閉塞され、海面の低下とともに平野の低地に残された水面）



■潟の概要

福島潟から南西約2キロメートルに位置する潟。1680年頃の福島潟の水面積は約5,800ヘクタールであったといわれているが、内沼潟はその一部であった。1816（文化13）年、福島潟を横断するように築堤された山倉新道（やまぐらしんどう：現主要地方道 新潟・五泉・間瀬線）によって、福島潟から分離されてできた。地域では「新開潟（しんがいがた、しんげがた）」とも呼ばれていたという。

戦後、周囲から干拓が進行し、面積約6ヘクタール、平均水深50センチメートルの細長い潟になったが、平成7（1995）年から北東部が埋め立てられ、現在は約1.15ヘクタールの大きさになっている。

■景観的特性

周辺の水田では、冬季になるとハクチョウなどが餌を採っている姿が見られる。周囲にはヨシ、マコモの小群落がある。内沼潟の風景について「小さい潟だが、朝霧がかかるときや雪の季節には幽玄の世界を演出しており、見とれるほど美しい」と表現する地元住民もいる。かつてハスが湖面に繁茂していたが、2012年頃から確認されなくなっている。

■内沼潟に関する諸活動

2010（平成22）年に潟の共有地権者等によって、内沼潟共有者の会が設立され、内沼潟の今後の方向性を話し合う場が整えられた。現在、ゴミ投棄の防止や公園化を目指し活動している。

「内沼潟からの手紙 2026年」

高橋 剛 潟環境研究所外部相談員／

内沼自治会 会長



拝啓 ご無沙汰で～す。私こと内沼潟は今、心地よい時間を過ごさせてもらっています。福島潟から分離されて以来210年。埋立てで水面が1.15ヘクタールしかなくなりました。

そんな中、私は長年ゴミ不法投棄で悩んできました。しかし、周囲では誰がゴミ処理をするのかなど他者依存的議論が多く、心細かった記憶があります。一方、昔からハスの花がいっぱい超美景といわれていたのですが、2012年にそれが突然跡形もなく消えてしまいました。世にも不思議な物語、まさにミステリーでしたね。

ところが2014年になって、私を取り巻く環境が変化し始めました。ともかくこの年から、潟に来てくれる人が画期的に増えました。自治会ニュースなどでも紹介されるようになったんですよ。そしてゴミの不法投棄も、行政と自治会の連携で監視カメラ設置という特効薬？が効いたのか、病状悪化を防ぐことができました。2016年にはNP0 新潟水辺の会が学術調査を、翌17年には内沼協会資源保全会が潟岸整備を実施してくれましたね。

あの当時、内沼潟共有者の会などよく来てくれた人が話していましたね。「潟のつばやきを聴くことができる地域になりたい」と、そして「互いにちょうどいい関係でいたい」と。

あれから10年、私は想いを感じてもらえる地域の中で「いい感じ」なのです。潟のミステリーも解明されつつありますし。なんといっても今はきれいなハスの花をたくさん見てもらえるようになったんですよ。よかったよかったです。あなたも近いうちにきっと訪ねてくださいね。まっていますよ。それではごきげんよう… 敬具

※編集者より：高橋 剛さんが内沼潟の気持ちを代筆するような形でのユニークな寄稿となりました。



ハスが咲いていた頃の内沼潟

蛇行した阿賀野川の一部が残った三日月湖

十二潟（じゅうにがた）

位置：新潟市北区平林、十二、灰塚／面積：約 5.4ha／
水面標高：T.P.+1.6m／水源：湧水・農業排水／成因：三日月湖（阿賀野川の蛇行部が短絡して残った河跡湖）



■潟の概要

阿賀野川が東へ大きく蛇行していた部分が残されてできた三日月湖。地元では「古阿賀（ふるあが）」とも呼ばれているとおり、かつては阿賀野川の本流であった。

十二潟は、横断する二つの農道によって上流から上池（かみいけ）、中池（なかいけ）、下池（しもいけ）に分かれている。

かつて潟の幅は 48 間（約 87 メートル）もあったといわれ、対岸の耕地への往来は、対岸まで張った綱をたぐりながら渡る「たぐり舟」を使っていた。しかし、突風が吹き荒れると舟が転覆し犠牲者が絶えなかったため、1938（昭和 13）年に近隣の人々が協力しあって橋をかけた。現在も農業用水源として利用されている。

■十二潟の植物

希少種であるアサザ、ガガブタのほか、コウホネ、ヒシなどの浮葉植物を見ることができる。

県内 4 か所しかないアサザの自生地のうち、最大の群落をつくり、夏には黄色の花が潟を覆い尽くす。

■十二潟に関する諸活動

岡方地区コミュニティ委員会が、保全活動や観察会の開催、外来植物チクゴスズメノヒエの駆除などに取り組んでいる。近年では周辺の小学校と連携し、潟の水質調査、植物分布調査を一緒に行うなど、潟に親しみを持ってもらうための取り組みも行っている。



案内看板



観察デッキ

「十二潟の現状と課題」

山崎敬雄 潟環境研究所外部相談員／

岡方地区コミュニティ委員会 会長



十二潟は地元では古阿賀と呼ばれ、阿賀野川の乱流蛇行跡である。総面積は 6 ヘクタール程であり、湖面はかつて土地改良区と 13 名の地権者が所有していたが、近年は埋め立てが進み現在は土地改良

区の所有部分と地権者 1 名の部分 1.6 ヘクタールのみが残され、潟全体の 75 パーセント程が埋め立てられている。

以前は蓮とヒシが湖面を占有していたが、現在は蓮が姿を消し、アサザ、ガガブタ、コウホネ等の植物や、ゲンゴロウブナ、カムルチー、ウシガエル、クサガメ等の生物が生息しています。

潟の環境は以前は豊富な湧水がでていましたが、この 30～40 年程度で大きく変化が見られ、近年は湧水が殆ど見られなくなっています。阿賀野川流域の地下水の低下が原因と思われます。

かつては潟の一部が不法投棄の場になっていましたが、2001（平成 13）年に結成された岡方地区コミュニティ委員会が地域の貴重な資源である十二潟の環境保全に焦点が当てられ、潟の一斉清掃が毎年行われるようになり、ゴミは年々減少しています。

2012（平成 24）年からは小学校の総合学習の時間を利用して潟の環境や歴史、水質調査等を実施し、地域全体で保全活動に取り組み、次世代の後継者の育成に努めています。

残された課題は湖面の民有地部分を、どのような形で残すかという問題ですが、地域、土地改良区、コミュニティ委員会、行政で知恵を出し合い、残された潟を保全できればと思っています。



小学校の総合学習

阿賀野川河口と日本海を一望できる池

松浜の池／ひょうたん池 (まっはまのいけ／ひょうたんいけ)

位置：新潟市北区松浜／面積：約2.2ha／水面標高：T.P.+0.5m
／水源：湧水／成因：河口閉塞湖（阿賀野川河口で、波や風で吹き寄せられた砂によって閉塞された水面）



■潟の概要

阿賀野川と日本海のすぐそばの砂丘地に位置する池。海岸から約100メートルのところにあるが淡水である。地元では「ひょうたん池」と呼ばれている。また、池が浅くて丸い形をしていたことから「輪湖（わご）」と呼ばれていた時期もあった。

昭和初期に存在していた池であるが、海岸の砂丘地にあるため、浸食や堆積によって池の形は頻繁に変わっており、いったん消滅していたこともある。現在の形になったのは、1973（昭和48）年頃とみられている。

■景観的特性

展望スペースに立つと小高い砂山と大きく広がる青い空を背景に、水面を望むことができる。遊歩道は整備されていないが、砂山にあがるとそこには日本海、阿賀野川、松浜の池の眺望が楽しめる。池を見下ろすことができる展望スペースには、松浜地区コミュニティ協議会が設置した、池の変遷や動植物について解説されている案内看板がある。

■松浜の池の動植物

絶滅危惧Ⅰ類のオオモノサシトンボやオオセスジイトトンボなどの貴重なトンボ類が確認されている。ライギョやフナのほかメダカが繁殖している。また、オニバスが自生している。

■松浜の池に関する諸活動

松浜地区コミュニティ協議会が環境整備活動のほか、池に親しみをもち、トンボなどの貴重な生物の存在を知ってもらうための活動も続けている。また、地元の松浜小学校の総合学習では、池の生物観察会を行っている。

「地域の宝、ひょうたん池（松浜の池）」

村山和夫 潟環境研究所外部相談員／

松浜コミュニティ協議会 地元学部会 部長



地域にある宝に光を当てる事を目的に、コミュニティ協議会に地元学部会が出来その活動の一つとして、ひょうたん池での清掃活動をやり始めて、もう8年になります。部会の中で、この池について

勉強をしながら少しずつ池の事がわかってくると、トンボや水生植物など貴重な物がこの池にある事を実感し、ではどうするか？の議論になり、今まで何もなかったこの池に展望スペースを作り池への案内看板を設置したりしてきました。

そんな中、もう少し池について調べたいと思っていた時、2年前に「NPO 新潟水辺の会」さんより池の成り立ちや水深などを調査したいとのお話があり、部会としてこの調査に協力する事で我々の思いも達成できると喜んで協力をし、頂いた報告書を財産として残せる形になり、残った課題についても調査を継続しているところです。

しかし、ではこの池をどういう形で「地域の宝」として残してゆくかを考えた時、池も周辺の砂丘も多くが民有地であり、海岸近くにある為、飛砂による池の縮小や海岸の浸食により最終的に海とつながるのではなど問題がある中で、行政や地域の団体に要望をしていく事はもちろんですが、この池にとって何が一番良いのか？今回の調査を手伝う中で始めてポートを出し池の中を真近に見た時に、ヨシの中を飛び回る無数の「セスジイトトンボ」や「オオモノサシトンボ」の産卵している場面を見れた感動は今も忘れる事ができません。

やはりこの池は、これらのトンボたちが安心して生息できる環境を維持していく保全活動を第一に考えています。



セスジイトトンボ

アカマツの林に囲まれた2つの砂丘湖

じゅんさい池（じゅんさいいけ）

位置：新潟市東区松園／面積：約0.8ha／水面標高：T.P.-0.3m
／水源：工業用水／成因：砂丘湖（ひとつの砂丘体の上のくぼ地にできた水面）



■潟の概要

東池（0.3ヘクタール）、西池（0.5ヘクタール）から成る砂丘上の池。池の周囲は赤松など多くの木々があり、遊歩道が整備された「じゅんさい池公園」として親しまれている。

住宅地に囲まれたじゅんさい池公園は、市街地に残された貴重な自然環境であり、多くの動植物が生息・生育している。「じゅんさい池」という名前の由来のとおり、1975（昭和50）年頃まで、年間10石（1,800リットル）あまりのジュンサイが採取されていた。その後、湧水が減少し池が枯渇した際、ジュンサイは絶滅した。1980（昭和55）年から工業用水がじゅんさい池に給水され、1984（昭和59）年に、新潟県内の笹神村からジュンサイが移入された。現在は少量だがその存在を確認することができる。

■景観的特性

住宅地に囲まれたじゅんさい池公園では、公園内はアカマツなどの林がつくりだす安らぎの空間がある。池のまわりを一周できる遊歩道を歩くと、池とまわりの住宅地との高低差を感じ、砂丘体のくぼ地にできた水面だということが実感できる。

春には、かがり火によりライトアップされたしだれ桜、夏には、人工飼育したホタルを鑑賞する人々で賑わう。

■じゅんさい池の動植物

じゅんさい池公園では、多くの動植物が確認できる。市街地・平地・山地・水辺と、さまざまな環境に住む鳥が生息し、水生植物ではジュンサイやタヌキモ、ガマやヨシなどが生育している。

近年ではブラックバス（オオクチバス）やブルーギル、ミシシippアカミミガメといった外来生物も確認されるようになっているほか、遺棄された黒ゴイや錦鯉も増加している。

■環境保全事業

樹林環境保全として、ニセアカシアの伐採とアカマツの植栽工事が新潟市により実施された。地元の中学生も植栽に参加し、総合学習で観察活動や落枝の搬出作業を行っている。

「じゅんさい池公園とは」

中村忠士 潟環境研究所外部相談員／

じゅんさい池公園を守る会



じゅんさい池公園は、池公園のように思われるが、アカマツを主高木とする林を含む公園です。

林の中にあるということとで他にない魅力を持ち、池、林を合わせた里地と言えます。それは動物ではヒキガエルが、植物ではミゾソバ、オトコエシなどの生物相の存在が証明してくれます。ヒキガエルは10

年位前まで西池で産卵がみられましたが、最近は見られません。それでも今年、東池近くの林内で成体にも会うことができ、ほっとしました。

池、林ではそれぞれ時代の影響とも取れる現象も見られます。埋め立てを免れて、自然の風が感じられる憩いの場となり継続されていることに喜びを感じます。憩いの場が里地としての質を低下させないで継続されるためには、今日、明日の娯楽の視点でなく、むしろ逆の視点も考慮した取り組みの必要性を感じます。以前のように子どもたちが遠足に訪れていた頃はどのような風が吹いていたのでしょうか。ヒキガエルに聞きたいです。

心地良い風が吹かなくなれば、恐そうな人も多く来るようになり、子どもたちが近寄れない場となるでしょう。そのような場になるのだけは回避しなければと思います。



ミゾソバ

市街地に近接しながらも広大な水面にハクチョウが訪れる潟

鳥屋野潟（とやのがた）

位置：新潟市中央区鳥屋野ほか／面積：約158ha／水面標高：T.P.-2.5m／水源：河川・排水路／成因：潟湖（海岸砂丘で閉塞され、海面の低下とともに平野のくぼ地に残された水面）



■潟の概要

中央区南部の市街地にあり、周辺には公園や公共施設が整備されている。北区福島潟に次ぐ、新潟市で2番目に大きな潟。

鳥屋野潟の成因時期については定かではないが、約3,000年前に現在の鳥屋野潟付近に海岸線が来ており、また、信濃川流域沖積層の堆積年代の測定などにより、約1,000年前以降の初期には潟湖化していたと解釈されていることから、約3,000年～1,000年前には鳥屋野潟の原型ができていたと考えられる。

鳥屋野潟へ流入する河川・水路は、栗ノ木川や周辺からの排水路をあわせ33本ある。鳥屋野潟からの排水は、かつては栗ノ木川を通じて信濃川河口部に排水されていたが、1964（昭和39）年の新潟地震以降、栗ノ木川下流への通水は遮断され、鳥屋野潟放水路を通じて、親松排水機場（1968年運転開始）から信濃川に排水されている。鳥屋野潟の常時水位は、周辺からの排水と豪雨時の洪水調節を目的として、親松排水機場のポンプでT.P.マイナス2.5メートルに維持されている。なお、栗ノ木川下流（常時水面標高マイナス1.65メートル）の浄化のため、竹尾揚水機場から1日数時間2立方メートル毎秒が栗ノ木川下流に揚水されており、鳥屋野潟の水は栗ノ木川―通船川を通じても信濃川に排出されていることになる。

鳥屋野潟流域のほとんどが海拔ゼロメートル地帯であり、洪水時には重要な貯留施設となる。現在、治水目的の湖岸堤の設計が行われているが、環境保全に配慮した設計・工事が行われる予定である。

■景観的特性

鳥屋野潟南部は、ビッグスワン、県立鳥屋野潟公園、いくとぴあ食花などが立ち並び、開発が進んでいるが、その一角に、潟の水面を広く見渡せる「清五郎の一本松」と呼ばれる場所がある。その松の木のそばに、2009（平成21）

年「水と土の芸術祭」で中学生らが制作した芸術作品「清五郎開拓八人衆」のモニュメントが並ぶ。

この場所は、かつて清五郎集落を貫く清五郎川が鳥屋野潟にそそぐ河口であり、集落を守る囲い土手があった場所である。潟の水面を背景に市街地が見渡せる開放感のある憩いのスポットになっており、散歩やスケッチなどで楽しむ人々の姿がある。

往時の鳥屋野潟の景観の素晴らしさについては、「鳥湖八景（ちょうこはっけい）」として、いまでも伝えられている。



憩いの場ともなっている「清五郎開拓八人衆」

■鳥屋野潟の動植物

鳥類は180種以上が確認されており、冬には4,000羽を超えるハクチョウが飛来する。水域ではアサザ、コウホネ、ヒシなどの浮葉植物がみられる。重要種として新潟県固有種のエチゴモグラの生息も確認されている。

■潟の産物や賑わい

排水機場の稼働（昭和20年代以降）以前、鳥屋野潟は栗ノ木川と信濃川を通じて日本海とつながっていた。そのため、かつてはコイ・フナなどの純淡水魚のほか、ワカサギやマハゼ、スズキなどやサケなどの回遊魚や海産魚も漁獲されていた。現在でも、海産のメナダが漁獲されているが、これは信濃川を遡上し、かんがい用などの揚水機を通じて鳥屋野潟に流入し、成長したものと考えられる。

近年では、漁業従事者は少なくなっているが、このボラ・メナダを含め、コイやフナなど鳥屋野潟の魚を食する催しが開かれ、周辺のレストランが鳥屋野潟の魚をメニューとして提供する試みが行われるなど、潟の魚を味わえる機会が増えてきている。

また、市街地に近接しながらも、広大な水面を擁する鳥屋野潟の魅力ある環境を発信するため、「とやの潟環境舟運」や「とやの物語」などのイベントが開催されている。

「鳥屋野潟の未来」

松浦和美 潟環境研究所外部相談員／

新潟市南商工振興会 理事



週末の朝早く、自転車で鳥屋野潟に向かう。ビッグスワンの向こうから陽が差し込み、潟沿いの専用ロードを走るランナーの頬に反射する。湖面で先にカヌーを浮かべている仲間に手を振る。潟のカ

ヌーハウスには色とりどりの舟が収まっている。栈橋と一体化したテラスでコーヒーを飲み一息ついてから、潟へ漕ぎ出す。今日は潟の漁師さんと一緒に水面のごみを拾う日だ。ハクチョウたちがシベリアに帰り、桜の季節には早いこの時期に、潟につながる水路の上流から下流、潟にかけて清掃する。以前は湖底に堆積した土が潟を浅くしていたが、しゅんせつが進み水深が確保されてきた今、水は透き通り湖底の魚たちがよく見える。「かつて潟の水を飲み、魚を捕って暮らした」昭和の高度成長期以前の潟の話を聞いて驚いたことがある。多くの人の努力で、一時は汚染されていた潟が本来の姿に戻った。近年までヨシが覆っていた岸辺も、今は子どもたちが水辺と触れ合えるように浅瀬が作られ、小さな水辺の生き物に会いに親子が足を運ぶまでになった。ゴミ拾いが始まる。潟の仲間が湖面に行き来する。漁協の漁場も見える。近くの加工場で開発したマブナの燻製が好評で、今や漁協の人たちはワークショップまで開く人気者だ。また、水浄化ロボット積載のガタッチョカヌーが、この日のネイチャートリップを率い「ゴミ拾いから始まった水辺の再生ツアー」が行われる。新堀沿いには中流から上流にかけてポートハウス&ホテルやポートオフィスが集い、若い研究開発者や起業家、外国人旅行者に人気の「エコ&クリエイティブ」スポットとなっている。彼らの楽しみは周辺で採れた自然栽培の野菜やコメを使って出される近くのレストランの料理である。鳥屋野潟周辺の小・中学校でも農家さんやシェフと共同開発のランチメニューが人気らしい。鳥屋野潟でゴミ拾いした後、潟野菜&潟魚の朝食を皆で焚き火をしながら食べるのが、この季節の楽しみだったりする。……以上、私たちが想像する未来の鳥屋野潟でした！こうなると、いいなあ。



鳥屋野潟でのカヌー

「潟の魚のひとりごと」

大野彦栄 鳥屋野潟漁業協同組合 理事会計

私たちは鳥屋野潟、清五郎潟に住んでいる魚です。私たち（コイ、フナ、メナダ等）のつぶやきを聞いてください。

おや、湖面に船外機船が出てきたよ？漁協の湖面清掃作業が始まるようだ。私たち魚は作業の邪魔にならないよう湖底に移動することにしよう、それにしても最近水深が浅くなって隠れ場に困るんだよね。湖底の土、何とかならないかな～。

今は下水道整備や清掃活動のおかげで潟の水がきれいになって、私たち魚も健康優良魚に育っていますよ。最近、潟周辺のお店のシェフたちが私たちを美味しく料理して皆に食べられるようになって感謝しています。もっともっと綺麗な水になるとうれしいな～。

おやおや、湖面がさわがしくなったぞ、夏休みの子供たちの声が聞こえるね。潟舟（板合わせ）、カヌー、手漕ぎボート、丸いボールの影が見えるよ、潟を楽しむイベントを開催しているんだ、私たち魚も応援するよ。イベントの時だけでなく、いつでも舟遊びや釣りができる常設栈橋があるといいのにな～

噂によると、潟周辺の小学生が漁協の人に協力して、毎年フナやコイの赤ちゃんを潟に放流してるらしいよ、みんなで大切に育てて一人前の魚にしないではならないね。小学生たちは潟の歴史や未来のことも学んでいて、最近「鳥屋野潟の歌」を作詞・作曲して披露した学校があると聞いたよ、たくさんの人に潟を知ってもらい、伝え継がれるといいね。

※編集部より：大野彦栄さんが、魚の気持ちを代筆するような形のユニークな寄稿となりました。



鳥屋野潟漁協による漁の様子



鳥屋野潟で獲れた魚

清五郎の地にあり、鳥屋野潟と水路でつながる潟

清五郎潟（せいごろうがた）

位置：新潟市中央区清五郎／面積：約 2.0ha／水面標高：T.P.-2.5m／水源：河川・排水路／成因：潟湖（海岸砂丘で閉塞され、海面の低下とともに平野のくぼ地に残された水面）



■潟の概要

清五郎潟は鳥屋野潟の南にあり、水面は清五郎排水路で鳥屋野潟に通じている。かつての清五郎潟の北西部分は埋め立てられ、現在では「天寿園」と呼ばれる庭園になっている。清五郎地区の住民によると、昭和 40 年代頃まで、清五郎潟でも雑魚を獲るための漁が行われていたという。

■清五郎潟の動植物

水面にはヨシが茂り、ヒシなどの水生植物が生育している。厳冬期には清五郎潟をねぐらとするハクチョウが多く見られ、鳥屋野潟で風雪が強い時の避難場所としての役割を担っている。

■清五郎地区の歴史

1598（慶長 3）年、新発田藩主の溝口秀勝が加賀から越後に入封した後、越後での新田開発を夢に 8 人の農民が加賀から新潟に移ってきた。この 8 人の中に「清五郎」という名の者がいた。清五郎は病弱で、現在の新潟市中央区清五郎地区を開墾する際、志半ばで病に倒れ、亡くなった。8 人の仲間の中で清五郎が最初にこの地に埋葬されたので、その名をとって、地名にしたといわれている。

かつては、鳥屋野潟と清五郎潟、その南側にいくつもある大小の潟とつながる川が、集落を貫くように流れていた。

「清五郎の今昔」（1985）によると、「丸潟から澤海長潟、鍋潟を通り清五郎小潟から清五郎の村中を流れ鳥屋野潟を経て栗之木川に続き、沼垂の町中を流れ海に続いて居た。」という。また、清五郎地区の住民によれば、川の水は、飲料水・生活用水であり、川は運搬や移動のための重要な水路でもあった。1948（昭和 23）年に栗ノ木川排水機場が完成し、鳥屋野潟の水位が下がると、清五郎川の水位も下がり、川端の家屋が傾くなどの影響が出た。1968 年に親松排水機場が運転開始されるとともに、清五郎川が不要になり埋め立てられ、現在の清五郎排水路が整備された。

亀田砂丘に残る唯一の水辺空間

北山池（きたやまいけ）

位置：新潟市江南区北山／面積：約 1.6ha／水面標高：T.P.+0.4m／水源：地下水・農業排水／成因：砂丘湖（ひとつの砂丘体の上のくぼ地にできた水面）



■潟の概要

江南区北山に位置し、亀田砂丘のくぼ地にできた池。現在は池を中心に北山池公園が整備されている。

亀田砂丘の砂丘間には、かつて大小 6 つの池が点在していたが、時代の流れとともに、北山池以外の池は、耕地や公園、住宅地に変わっていった。

「兄池（あんにゃいけ）」と「弟池（おじいけ）」と呼ばれる大小 2 つの池があり、1965（昭和 40）年に兄池は埋め立てられて、公園と住宅地に変わった。現在、北山池として残っているのは弟池で、かつて北側では竹藪が水面まで続き、池に沿って一周することはできなかった。

■景観的特性

北山池公園内は、ヘラブナ釣り、桜の名所として親しまれている。緑色の花を咲かせる珍しい桜「御衣黄（ぎょいこう）」を見ることができる。

■北山池の動植物

北山池は、公園としての整備がされながらも、アサザなどの希少種が生育している。

—平成 27 年第 3 回ネットワーク会議より—

「先人の残してくれた宝 北山池」

清野 誼 潟環境研究所外部相談員／

北山池公園の自然を愛する会

北山池は亀田砂丘（新砂丘 1）の 2 列の砂丘列の間にできた砂丘湖で、砂丘列の上に集落があります。かつては、砂丘の麓に北山池（兄弟池）、丸山の池、茗荷谷の池、松山の池（稚児池）が並んで存在していました。各々の池には高さ 10m～20m 程度の松林に囲まれた砂山が連なっていました。池や砂山は各集落の入会地、共有地として地域の生活環境に密着し、無くてはならないものでした。私が子どもの頃、山の畑で野菜を作り、大人たちが池で水を汲んで、砂山を上り共有地の畑に水をやり、松林の松葉や枝を燃料にしたりしていました。共有地を守るため、昭和 55 年に北山池共有地組合が、北山池を整備しました。

釣り愛好家が集う、阿賀野川の旧河道

六郷ノ池（ろくごうのいけ）

位置：新潟市秋葉区六郷／面積：約 1.6ha／水面標高：T.P.+6.5m／水源：農業排水／成因：河跡湖（阿賀野川の河道跡に残った水面）



■潟の概要

秋葉区六郷の阿賀野川沿い（県道 17 号線沿い）の田園地帯にあり、阿賀野川の旧河道である。1915（大正 4）年から行われた阿賀野川第一期改修工事によって堤防ができ、池となった。現在は南北約 400 メートル、東西約 50 メートルのやや湾曲した形をしている。

2002（平成 14）年まで、池の水は農業用水として利用されていた。

1961（昭和 36）年頃までは、年に 2 回、漁が行われており、フナやコイ、ライギョが獲れていた。現在では、ヘラブナ釣り場として釣り愛好家が集まっている。

■六郷ノ池に関する諸活動

池の管理は、「六郷池組合」により行われている。環境整備として、池周辺の草刈、ゴミ拾い、側溝の泥上げなどを年に 5、6 回程度行っている。

「六郷ノ池の今後」

佐藤 譲 潟環境研究所外部相談員／

六郷池組合 代表



かつては農業用水として利用されていたが、今はパイプ灌漑となり用水としての利用は、ほとんどなくなり、今ではへらぶな釣りの愛好家のための池になってしまった感が強い。

今後のこととなると、隣接して小さな公園が整備されているので、さらに、子どもが水辺に近づくように池の周辺環境整備と水質の改善などに取り組み、やすらぎの場として多くの人から訪れてもらえるようにできないだろうかと思った。

また、そのような人の来訪によって地域の活性化にも一役果たせればと思っている。

九十九川と呼ばれた能代川の切所

北上の池（きたかみのいけ）

位置：新潟市秋葉区北上／面積：約 0.2ha／水面標高：T.P.+4.3m／水源：湧水／成因：落堀（能代川の洪水が堤防を越流氾濫して、洗掘されてできた池）



■潟の概要

秋葉区北山、能代川左岸の堤防沿いの県道 5 号線の脇にあり、地元では切所（きりしょ）と呼ばれている。昭和の中頃までは約 1 ヘクタールの面積があったが、現在は 0.2 ヘクタール程度となっている。池の成因は能代川の堤防が破堤したときにできた「落堀（おっぼり）」と考えられる。

地元住民によると、子どもの頃には「切所」と呼ばれる池は 3 カ所あったとのことである。かつての池の面積は、現在の 6 倍ほどあり、日吉神社が建っている場所も、かつては水面だったそうだ。また、かつては、池に舟を浮かべ投網をうって魚を獲っていたといい、その経験から、池の深いところでは 4 メートルほどあったのではないかと推察している。

現在、池の脇に建立された日吉神社が、北上の池を所有し、町内会で管理しているが、釣り人のマナーやごみ問題に悩まされているという。



日吉神社

市内で唯一のラムサール条約湿地

佐潟（さかた）

位置：新潟市西区赤塚／面積：約44ha／水面標高：T.P.+4.8m
／水源：湧水／成因：ため池（形成年代が異なる砂丘間の谷地に、道路を兼ねた堤防が横断する形で作られたことで、水が溜まってできたため池）



■潟の概要

佐潟は、新潟市西区の赤塚地区に位置し、上流側の小さな上潟（うわかた）と下流側の大きな下潟（したかた）の、大小二つの潟から成り立つ淡水湖である。1996（平成8）年に、周辺を含めた76ヘクタールが日本で10番目に、ラムサール条約登録湿地に指定されている。周囲は海拔約15～40メートルの砂山に囲まれており、その斜面はスイカやダイコンなどが作付される畑として利用されている。

河川流入はなく、周辺の砂丘からの湧水で涵養（かんよう）されている。水面標高は、下潟の出口にある水門で、T.P.プラス4.8メートル程度に維持されている。排水は、その水門から荒江（あらいど）と呼ばれる排水路に入り、広通川の下をくぐり、旧広通江排水路を通り、旧広通江排水機場で新川に揚水され、海に至る。

■潟と人のかかわり

佐潟は昔から多くの人々が関わって保全されてきた。佐潟が位置する赤塚地域では、かつて、農業をはじめとしたすべての用水に潟の水を利用していた。潟の湧水を出やすくするため、夏の水枯れ時には潟にたまったドロや枯れた水草を取り除く「潟普請」と呼ばれる一斉清掃が地域住民総出で行われていた。

また、佐潟の岸辺では、明治時代以前から稲作が行われており、田んぼの風景が広がっていた。春になると、耕作者が湖底から掻き揚げたドロ（植物遺骸）を舟で運び、有機肥料として利用した。

このように、1960年代（昭和40年頃）までは農業用水池や淡水魚の良好な漁場として、また岸辺は水田として人々の生活にとってなくてはならないものであり、地域住民の直接的な関わりがあった。そのため、越後平野の多くの湖沼が姿を消していく中、佐潟は地域の人々によって、その生態系を維持した水辺が残されてきた。



漁の様子



店頭に並ぶハスの花

現在でも、冬場はコイやフナ等の内水面漁業が行われ、地域に密着した潟の管理が行われている。

また、お盆の時期には、早朝、地域の人々が舟に乗りハスの花の刈り取りをする姿がみられる。そこで刈り取られた佐潟のハスは盆花として地域で消費されている。

■佐潟の動植物

夏の湖面には、ハスやヒシが広がるとともに、ミズアオイ、コウホネ、オニバスなどの水生植物が見られる。

佐潟は、鳥類相が豊富で、これまでに208種の鳥類が確認されており、冬期はカモ類が多数越冬するのが特徴。特に、コハクチョウの越冬数は毎年3,000羽以上で、全国有数の場所である。

■佐潟周辺自然環境保全計画

1996（平成8）年にラムサール条約に登録された。2000（平成12）年には『佐潟周辺自然環境保全計画』が策定され、地域住民をはじめ関係団体や行政が協力して、将来にわたり佐潟周辺の自然環境を保全することが図られている。また、2006（平成18）年に設置された『佐潟周辺自然環境保全連絡協議会』により佐潟での取り組みの報告・検討をはじめ、保全計画の進行管理が行われている。2014（平成26）年に再改定された第3次計画では、「かつて里潟として人の手が加えられていたように、人との関わりの中で多くの動植物が生息・生育する環境を守り育てていく」ことなどが目標設定されている。その実施の1つとして、佐潟の水質改善を目的に、2014～2015年には大型機械を使用して浚渫を実施している。

■潟と人との新たな展開

現在の佐潟と人々との関わりは、かつての潟と人との関わり方と異なるかたちでの新たな展開がみられる。潟のドロ揚げや清掃活動を地域住民が主体となり実施する現代版「潟普請・クリーン作戦」や、市が地域住民に委託し、ヨシの刈り取りや「ど」と呼ばれる、潟辺りの水路の再生などに取り組んでいる。

また、佐潟観光協会主催の夏の佐潟まつりでは、水面に燈籠を浮かべたり、佐潟と歩む赤塚の会による潟舟の乗船体験も行われていたり、佐潟の水辺に親しむ、さまざまな取り組みが行われている。

「私が思う『潟の未来』」

涌井 晴之 潟環境研究所外部相談員／

佐潟と歩む赤塚の会 代表



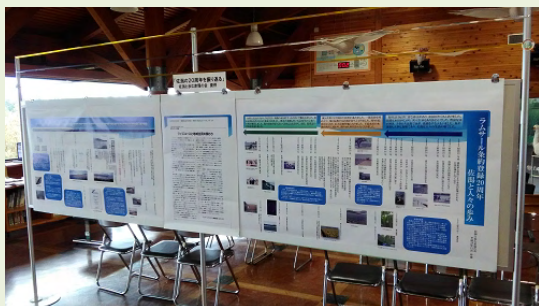
佐潟をフィールドに地元有志らと活動するようになって 2017 年で 15 年目を迎える。歩む会では春先の潟舟体験を皮切りに佐潟まつりでの灯籠、秋の潟普請、鯉・雷魚を食す「佐潟を喰らう会」などの

イベントを通して市民、学生と交流を深めている。16 年は佐潟がラムサール条約湿地に登録され、20 周年の節目で新潟市主催の佐潟 20 ラムサールフェスに実行委員として参加した。この中で 2018 年の同条約の締約国会議で福島潟をラムサール条約湿地に登録しようとする新潟市北区の住民運動を知った。権利関係者の意見調整が大変と思われるが、オープンな討議を期待したい。

環境省は、ラムサール条約湿地としての国際基準を満たすと認められる湿地（潜在候補地）に選定されるためには国際基準を満たすだけでなく①地元自治体などの賛意②鳥獣保護法、自然公園法などの国内法による保護担保措置が必要としている。今後、この指針に基づいて国内候補地の絞り込み作業が行われていくであろう。

一方、“先輩格”である佐潟はせっかく手にしたラムサール条約湿地としてのブランディングが地域活性化、観光分野などで十分に生かし切れていないと考える。前述した佐潟 20 ラムサールフェスで歩む会は佐潟の 20 年を振り返る年表を作成した。この中で新潟市が当初示した都市公園整備計画との乖離に徐々に佐潟に関する地元住民の関心が薄れていったことを再認識した。私も佐潟の登録時は、賛意どころか関心を寄せていない地域住民の一人だった。

佐潟 20 フェスで赤塚小学校、赤塚中学校の児童、生徒の佐潟との関わりを聞く機会を得た。里潟として佐潟を次世代に継承するために水辺空間、総合学習の場として利活用を進めたい。



ラムサール条約湿地として登録された佐潟の 20 年間を振り返る年表

（2016 年 12 月 3 日、佐潟水鳥・湿地センター）

名前の由来は神社の手水舎

御手洗潟（みたらせがた）

位置：新潟市西区赤塚／面積：約 6.5ha／水面標高：T.P.+6.6m
／水源：湧水／成因：砂丘湖（ひとつの砂丘体の上のくぼ地にできた水面）



■潟の概要

佐潟の北側に位置する砂丘のくぼ地にできた潟。昭和 20 年代には、地下から湧き出る清水をたたえたジュンサイの潟であったといわれている。当時の地元住民は潟で生育するジュンサイやヒシの実を食用として採取していた。近年は、潟全体を覆い尽くすほどのハスの群落が広がっているハスの潟に変わっている。

■御手洗潟の動植物

潟の周辺部を含め約 170 種の植物が確認されている。

■御手洗潟の名前の由来

かつて、潟の水は、北側の砂丘の松林の中にある船江神社（現在の神明社）の前を通り、木山の方へ流れていた。船江神社の参拝者がこの水で手を洗い、口をすすぎ、手水舎（てみずや、ちょうずや）の代わりにして、身を清めてから参ったため、御手洗潟の名前がついたといわれている。



一面に広がるハスの花

さまざまな伝説が残る池

ドンチ池（どんちいけ）

位置：新潟市西区赤塚、中権寺（地籍は赤塚であるが所在は中権寺に近い）／面積：約0.3ha／水面標高：T.P.+2.6m／
水源：湧水／成因：砂丘湖（ひとつの砂丘体の上のくぼ地にできた水面）



■潟の概要

西区中権寺（地籍は赤塚）にある砂丘湖である。周囲を森と墓地に囲まれ、池に近づくための道は、特に整備されていない。地元住民でも場所を知らない人も多い。1990年代には約170種の植物が確認されており、水生植物のほか、平地や低い山地の植物、海浜植物などが現在もみられる。

■さまざまな言い伝え

土地や水の権利をめぐり争われた場所のことを「論地（ろんち）」と呼ぶが、江戸時代、この池は赤塚村と内野村との水論の場となったことから、「論地池（ろんちいけ）」とも呼ばれている。その他にも尼池（あまいけ）、グランド池とも呼ばれている。

ドンチ池には尼寺が沈んでいるといった伝説や、幽霊・河童伝説といった池にまつわる秘話・伝説が多く残されている。

—平成27年第3回ネットワーク会議より—

「子どもの遊び場ドンチ池」

中原 藤雄 赤塚郷土研究会 会長

松を主体とした森のなかに静かに存在する水面であるが、40年ほど前は、現在ほど木々が生い茂っておらず、周りから池がよく見えた。池の東側は浅瀬で、かつてはポンプ小屋がたち、池の水を周りの田の用水として使った時期もあった。キノコ採り、薪取り、魚釣りや雪遊び、散策の場として親しまれた。近隣の学校の遠足で子どもたちが訪れていた時期もあった。子どもの頃（昭和20年代）は池がプール代りで、学校が終わると毎日のように泳ぎに行ったという。水深が深く、足がつかないため必死で泳いだ記憶がある。

中ノ口川を行き交う人を見続けた池

金巻の池／水戸際池

（かねまきのいけ／みとわいけ）

位置：新潟市西区木場、金巻／面積：約0.7ha／水面標高：T.P.+0.1m／水源：湧水／成因：落堀（中ノ口川の洪水が堤防を越流氾濫して、洗掘されてできた池）



■潟の概要

西区金巻にある諏訪神社に隣接しており、その昔中ノ口川の堤防が洪水時に破堤してできた池。旧黒崎浄水場の排泥処理池だったが、新潟市との合併後は公園として整備されている。

現在は放流したヘラブナ釣りの人気スポットとして多くの釣り客が集まっている。

■地元での名称

地元では、宮池（みやいけ・みやのいけ）、水戸際池（みとわいけ）、木場池（きばいけ）、山佐池（やまさいけ・やまさがいけ）など、さまざまな名称で呼ばれている。



隣接する諏訪神社



釣りに関する看板

四季折々の花も楽しめる、角田山のふもととの潟

上堰潟（うわせきがた）

位置：新潟市西蒲区松野尾／面積：約 11ha／水面標高：T.P.+3.5m／水源：河川／成因：人造湖（かつて水面標高 T.P.+6m 程度であったが、排水路の掘削により水位低下で陸化したところを水面標高 T.P. +3.5m 程度まで掘り下げて造られた池）



■潟の概要

角田山のふもと近くにあり、昔は農業のかんがい用水源・降雨時の調整池として利用されていた。干拓が計画されていた潟であったが、1967（昭和 42）年、減反政策が始まった関係で干拓は中止となった。その後、昭和 50 年代にかけて行われた土地改良事業により潟周辺の用排水路が発達した。かんがい用水源として使われなくなったことと排水路による地下水位の低下、水の出入りがなくなったことにより、潟が陸化していった。

しかし、1993（平成 5）年から 1997（平成 9）年度の 5 年計画で周辺環境の整備、陸化した潟の掘削が行われ、1998（平成 10）年度には復元された潟を中心に上堰潟公園が開園した。

現在でも、潟には周辺水田の排水が入り込み、豪雨時には上堰潟は調整池となる。それらの水は西山川～広通川～新川を通じて排水され、上堰潟は海と直接つながる潟となっている。



上堰潟公園

■上堰潟の動植物

干拓により、一時水生動物の生息が途絶えたが、周辺の水田地帯や西川用水を通じて様々な種類が戻ってきている。現地調査と聞き取り情報により、18 種の魚類が確認された。新川～広通川を通じて、潟の直下までサケの遡上が見られる。

野鳥の休憩地、採餌地として重要な場所である。上堰潟で確認される鳥類は、佐潟の鳥類相と似ているが、日中は常に来園者があるため、ハクチョウ類、ガン類による潟水面への着水はほとんどみられない。約 80 種の鳥類が確認されている。

■景観的特性

上堰潟公園は自然豊かな都市公園であり、園内では春にはサクラや菜の花、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスなどの四季折々の花や、晴れた日には、潟に角田山が映り「逆さ角田」が楽しめる。また、水辺を間近に感じられ、潟の中を横断できる木道がある。

秋には、2009（平成 21）年から武蔵野美術大学（東京都小平市）の学生と市民ボランティアとの協働制作による「わらアート」作品が公園内に設置される。



逆さ角田（上）、わらアート作品（左下）、潟を横断する木道（右下）

■上堰潟に関する諸活動

上堰潟周辺の耕地整理が実施される昭和 30 年代以前の様子は、春になると、雪解け水がたまり始めて、4 月には見渡す限りの現在の田んぼが一面、水面下になった。上堰潟周辺の集落はどの家にも「田舟」と呼ばれる農作業用の舟があった。角田山の裾あたりの耕地に作業に出かけるときには、舟ののって作業に出かけるなど、移動用としても使った。かつての子どもたちは、潟での遊びに加え、自然と舟のこぎ方を身に着けたという。

現在では、その子どもたちが大人になり、「上堰潟田舟の会」を結成。地元小学生に乗船してもらう機会の提供を通し、上堰潟についての理解を深める活動を行っている。

「上堰潟は子どもの遊び場」

齋藤 一雄 潟環境研究所外部相談員／
上堰潟公園を育てる会 代表



昔の上堰潟というのは子供の遊び場みたいところで、暇さえあれば潟の中で舟で遊んでたというのを思い出します。春になると、雪解け水がたまり始めて、4月、5月といま見渡せる田んぼが一面水面下になり、その頃になるとうちの裏口のすぐ近くから魚釣りした覚えがあります。水が溜まって絶好の釣り場になったのを思い出します。

夏になるとその頃は一面のハスが咲いていました。子供が大勢舟に乗って潟の真ん中まで行って、ひっくり返して遊んでいました。泳げない子どもは遊び相手にしてもらえないという、厳しい子ども仲間の掟があったように思います。子どもたちにとって舟遊びというのは、当たり前のことでした。

舟は農作業に使うから、部落のどこのうちにもあったわけです。水が溜まると都合のいい場所に係留しておいたのを子どもたちがちょっと、失敬して遊んでいました。潟に関わる仕事していた人がいたので、その家の舟を拝借したような記憶があります。その舟を使って潟の風上まで行って、持ってくるとしかられるから、風上で離して来る。舟だけおいてくる。上流が風上になるから、そこで離すと戻っていく。舟はのぼっていかないから、いやでも戻ってくるんです。

私は毎年、松野尾小学校に出前授業にいきます。授業のなかで、上堰潟が沼地になる以前の話もします。周辺の土中から石器類、縄文土器の破片が出土していることなど、大昔の生活の痕跡があることを話します。

こうした話をしていると、上堰潟公園の一角に竪穴式住居や古代の人が使ったとも言われる草舟などを作って、みんなが語り合える場を作れたらいいなと思います。また、古代の歴史から現在まで、上堰潟に関する問題で「上堰潟検定」を作ってみるのもいいなと考えています。



子どもたちへの田舟乗船体験

かつての鴨の猟場

仁箇堤（にかつつみ）

位置：新潟市西蒲区仁箇／面積：約5.6ha／水面標高：T.P.+9.2m／水源：湧水／成因：ため池（谷地を堤防で閉め切ってきたため池）



■潟の概要

西蒲区仁箇、角田山のふもとに位置するため池。かんがい・防火用のため、江戸時代に築造され、現在も農業の水源池として利用されている。

昭和後期は上堰潟が干陸化しており、周辺地区唯一の水辺であった。そのため、地域に愛される水辺となるよう、1987（昭和62）年から3か年計画で周辺の環境整備（あづま屋、遊歩道等）が行われた。また、全国に多数存在する、老朽化したため池の一つであったため、1994（平成6）年～1996（平成8）年にかけて堰堤が改修されている。

春には30本余りの桜が咲く、隠れた桜の名所でもある。

■サカアミによる狩猟

仁箇堤では、かつて鳥猟が行われていた。「サカアミ（サカウチアミ）」と呼ばれる道具を使った猟法が、昭和の中頃まで行われていた。これは、Y字に竹枠を組んで作った網を、丘、やぐらの上、林の間などから、上空を飛んできた鴨に目掛け、放り投げて捕る猟法である。

潟の現状に関する参考意見（ネットワーク会議参加者より）

潟	参考意見	潟	参考意見
福島潟	・福島潟では、生きものの生息環境と潟の景観を損なわない施設整備を心がける必要がある。「ふるさとの風景」として訪れる人の心に安らぎをもたらす価値を損なわないようにしたい。 ・潟の保全と持続的な利用を進めていけるように関係する行政や地域、団体がしっかり手をつないで未来への方向性を共有し、形（保全利用計画の策定など）にすることが必要ではないか。 ・適切に管理された観光は持続的な自然環境保全に対し有効な手段と思われる。ただし来訪者が一時期に集中すると（菜の花の時期や自然文化祭など）環境負荷になることを考慮すべき。 ・東側の歩道は、野鳥の生息に影響を及ぼさないように水際から離す必要がある。 ・イベント開催時、東部や南部にもトイレが必要。	鳥屋野潟	・潟の自然を学び、触れ合う施設が十分でない。 ・水に近づける場所や、桟橋、ボート置き場の整備が望まれる。 ・流入河川から上流で捨てられたゴミが流れ着く。
		清五郎潟	・ゴミの不法投棄の監視が必要。
		北山池	・釣りの障害になるとして希少種のアサザの除去や公園の植え込み、樹木を伐採する行為がある。 ・釣り人の撒き餌による水質悪化が懸念される。 ・過去には、ブラックバスの不法な放流があり、現在もバス釣りが行われている。釣り人の利用マナーの向上が求められる。 ・水際部はほとんどが矢板護岸で、転落すると危険である。水際に抽水植物が生育するなど、より自然なかたちでの整備を望む。 ・駐車場は小さく、入り口が狭く、利用しにくい。
内沼潟	・内沼潟への案内看板がない。 ・来訪者が増えるとトイレや駐車場が必要になる。 ・福島潟と連携したPRが望まれる。 ・数年前から、水面に何も生えない。 ・水質が悪く、原因を探る必要がある。 ・農業生ごみの捨て場となっている。	六郷ノ池	・耕地整理のパイプ灌漑によって用水が入らなくなり、水質の悪化が進んでいる。 ・トイレや駐車場の整備が望まれる。
		北上の池	・来訪者が増えた場合にはトイレや駐車場の整備が必要である。
十二潟	・潟南部の遊歩道、周回遊歩道の整備と観察デッキの延長が望まれる。 ・湖面が民有地で施設整備ができない。所有者から売却の意向があり、買い取りの検討も必要。 ・一部の民有地でがれきの埋め立てが行われており、規制が必要である。	佐潟	・ヘドロの堆積や水質の悪化がみられ、夏場にはアオコが発生する。 ・ワイズユースの周知が足りていなかった反省から、普及啓発を担う佐潟水鳥・湿地センターの役割の強化が地元から求められている。 ・ゴルフ練習場のネットが景観を損ねている。
松浜の池	・希少な動植物が確認されている一方で、スイレンやブラックバス（オオクチバス）などの外来生物もみられる。バス釣りや再放流に対する対策が必要である。 ・海岸の近くにあり、将来的に飛砂で池が埋まる可能性も否定できない。 ・ゴミの不法投棄対策、トイレの整備、駐車台数の拡大が望まれる。	御手洗潟	・湖底に堆積するヘドロは佐潟より深刻で、浅化による水質悪化が懸念される。異臭もあるため、浚渫などのヘドロの対策が必要ではないか。 ・従来の排水管の上に新しい排水管を伏せたため、自由な水位調節ができない。大雨で潟端の畑地が冠水する状況もある。
じゅんさい池	・じゅんさい池公園は、住宅地にある貴重な自然空間、憩いの場である。散策、ウォーキング、動植物の写真撮影など、様々な利用者と公園の保全活動を行う市民団体や地域住民がおり、整備の方向性を定めることが難しい。 ・生態系保全作業は、啓発を兼ねて市民参加型の活動をめざすべき。他の都市公園とは異なる自然公園として位置づけ、整備の方向と利用のあり方を住民とともに考えていく必要がある。 ・オオクチバス、コイ、ミシシippiaカミミガメ、園芸スイレン、ハゴロモモ（フサジュンサイ・カボンバ）などの外来種が侵入し、在来種の生育・生息に大きな影響を及ぼしている。	ドンチ池	・現状の環境を維持し、当面は来訪を促す広報や施設整備を行わない。 ・現在は池へ通じる歩道もなく、唯一の踏み跡も木竹が生い茂っている。利用者の安全面や防犯上からは周辺の木竹の間伐が必要である。
		金巻の池	・区主催の史跡めぐり、まち歩きのコースになっており、池の成り立ちを紹介する看板があるとよい。 ・隣接する公園の駐車場を利用できるが、明確な案内表示がない。利用者のためには表示看板を設けた方がより親切である。 ・ヘラブナ釣りを楽しむ市民は多いが、周辺にトイレがないことから、利用者にとっては不便である。
鳥屋野潟	・潟を一周してみると、ヨシ原が視界を遮り、水面が見えにくいところがほとんどである。また一般の人が水面に近づける場所はあまりない。 ・一方、ヨシ原は貴重な動植物の生息・生育地で、毎年訪れる白鳥は市街地に残された豊かな自然環境の象徴となっている。ヨシ原を保全しながら市民が潟に近づける環境を整備することが望まれる。	上堰潟	・ブラックバスの大物釣り場として知られており、夕方5時以降に訪れる人もあるという。ルアー釣りの規制、再放流禁止の看板を設置する等の対策が必要 ・桜、菜の花の時期には公園利用者が増加し、トイレの絶対数が足りない。
		仁箇堤	・現状のままでよいと思われる。